
色彩の帝国

ナナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色彩の帝国

【Nコード】

N2791Z

【作者名】

ナナツ

【あらすじ】

色彩の女王が生み出す力によって絶対の平和を約束された世界レイストロ。

しかし女王は死んだ。

崩れ始める神話の世界。秘密は明るみとなり、女王は暴かれる。闇を孕む人々の想いが錯綜し、軍人たちは女王に狂う。

その中で現れた少年、色彩の鍵。

彼は何を知り、何を見て、世界を導くのか。

黒に落ち行く人々の戦乱ファンタジー。

物語を紡ごう。

色彩を紡ごう。

私は世にこの話を語り継ごう。

そして言うのだ。

この世界は色に満ち溢れ、色彩の恩恵を受けた素晴らしき人々がいた、と。

忘れないように。

私は物語を紡ごう。

序章 色を失うとき

まず最初に記すはやはりあの事件からだ。

色彩の世界、名はレイストロ。私の住む世界。私の親であり子供でもある。そして私自身でもある愛しい世界。

レイストロ歴1140年。

この近年、世界は虫に食われた衣類のようにぼつぽつと黒い点が地上に現れていた。最初は小さかった点はやがて辺りを飲み込むように広がり、肉体を蝕む腫瘍のようなものになった。

色彩の女王に守られしこの世界に始めに現れた「死」の兆候だった。

世界の死は女王の死。女王の死は世界の死。

世界は世界が生み出した女王によって保たれていた。女王からあふれ出す色彩で世界は色づいていた。

その色が褪せつつある。

徐々に鮮明だった色はくすみ、抜け落ちて黒い塊と化す。

ぬるま湯に浸るように平和だった人々の心にも徐々に黒いものが現れ始め、大地と同じように色が抜け落ちつつあった。平和の字しか知らない人々の心にいつしか争いの念が生じる。

まるで何日も餌にありついていない本能むき出しの獣のように、意味もなく暴徒と化す。黒き影よりもさらに黒く、内面に潜むありとあらゆる抑圧されていた狂気が滲み出す。誰にも知られないうちに、それは徐々に大きく膨らみ始めていた。

そして少し時は過ぎ、レイストロ歴1141年の終わりのことだった。

その頃から黒い大地を「ブラックテューマー（黒い腫瘍）」そして人を「ロットシャドウ（腐った影）」と呼ぶようになっていた。

汚物の塊の腫瘍の土地、そこに住まうな垂れた影。みな、爆破で焼きついた影のように土地にしがみついてじんわりと時を舐めるように生きていた。人を食らいながら。

色彩の女王は泣いた。

己の存在に。己の自我に。己の色彩に。そして、これから起こる全ての出来事に。全ての悪がここにあるとわかりながらも止めるこ

とができない未来に。

全てに涙した。

それでも女王の死は近づいている。暗い未来はすぐそこまで来ている。

そしてレイストロ歴1145年。

色彩の女王が、死んだ。

実にあっけない死だった。

彼女は信頼する人に見守られ、息を引き取った。

人々は泣いた。女王がいなくなったことを。色彩が消えて行くことを。世界が消えて行くことを。

色彩が薄れていく。

薔薇に似た芳香がやんわりと風に流されて消えていく。空は嘆くように黒い雨を流し、女王の色はさらに落ちて行く。

だが、まだこの時誰も知らない。歯車が狂っていることを。じわりと一個ずつ、確実にずれて軋んでいるのを。

世界が孕んでいる、女王が孕んでいる秘密を。

狂いつつある中―もしくは狂った中、世界はもう一度産声を上げるだろう。

彼女の放つ咆哮と赤い炎で。彼の翡翠色の眼光で。

黒き腫瘍が妬かれていく中、彼女は口だけ笑って見せて彼にこう言う。

「……お前には選択肢が三つある。三つあることをまず感謝してほしいね。……そう、残された道は三つ」

灼熱の赤と灰になる黒が雄たけびを上げながら舞い上がる。彼女はそれを背負い、さらなる笑みをこぼして人差し指を上げる。

「一つ、大人しくこの私に連行される。二つ、いやいやでもとりあえず連行される。三つ……このまま焼かれて死ぬ。さあ、どうする？……パディ・デュランダ？」

炎を映しこむ翡翠の瞳が鋭く光る。彼は喉を鳴らし、眉間にしわを寄せ、皮肉をたっぷり含んだ笑みを彼女に向けた。立てた中指と共に。

「……くそつたれ」

なんて始まり方だろう。

こうして世界は再び色彩を紡ごとと叫ぶ。

狂った歯車を直そうと必死にもがき、平穏なる未来を手に入れる

ために。

レイスト口歴1145年。

誰もが忘れることのできない年。

色彩の女王が死んだ日。

その日を境に世界中に生まれた「黒」は、服に落としてしまったワインのようにじんわりと、そして急速に広がっていった。これは色彩の恩恵を失った証拠。世界が黒く染まる前兆。

世界を穢す黒は焼き払い、浄化しよう―レイスト口歴1146年より、「ブラックテューマー」を焼き払うという意、「ブラックアウト」が実施された。

「彼」がその被害を被るのはまだ先の話である。

レッドゾーン 1

灰色の煙が立ち込める。まるで湿気をふんだんに含んだ雲のように煙は天井にもくもくと立ち込めていた。色彩の女王がいた頃にはあまり見られなかった現象だ。

「……ここにいると肺が病むな」

ぼつりと女は言葉を漏らしたが、誰も答えるものはいない。吐き

出されるのは灰色のよんだ空気のみ。

レイスト口歴1148年。色彩の女王が死んで早くも世界は三年を迎えた。

色彩の帝国と呼ばれる世界、レイスト口は女王という柱を失い急速に衰えていった。広がる「ブラックテューマー」のせいもあるが、それを消そうとする運動、「ブラックアウト」の繰り返しによる街の破滅、退廃もその原因の一つとされる。表向きは平和な色彩のままだが、裏は恐ろしいほど脆く崩れていた。

こうした黒い世界を見ると、女王の力がいかに万能か、神であるかがわかる。

女王の力によって構築される世界。女王が世界を繁栄させる「色」を「力」を「光」を放ち、世界を安定に保っているのだ。それらがなくなった途端、これだ。色彩の恩恵はなくなりつつある。大地や大気は徐々に病み始め、人々は次第に力を奪われる。

女がいるここ、バーに転がる人々（ロットシャドウ、と呼ばれている）も例に漏れず、こうして先ほどから何をするわけでもなくただ煙を吐いている。

「……中々……暇なものだ」

女は埃の浮いたグラスを持ち上げ頬をつき、辺りを見回してため息をついた。やはり反応は何も返ってこなかった。

黒ずんでもはや影と化している男たちだったが、女だけは違った。

同じ黒でも少量の光でも艶やかに揺れる肩まである黒い髪、鋭くも色気を含んだ切れ長の藍色の目。光によっては紫紺にも見え、瞳の奥には獣のようにたぎった赤で満ちている。何より、全身から噴出す猛々しいオーラ。全ての色を放つこのオーラは普通の人なら圧倒され、ひれ伏すだろう。

そこにいきなり咲いた花、にしては、輝く力が強すぎるが、大げさに言うとは太陽のようだった。いや、太陽を食らった獰猛な獣だろうか。女を見つめたものはおそらく目がくらみ、よけいに黒ずんてしまっだろう。

それほど強い色彩を放つ女が、どうしてこんな場所にいるのか。誰も興味を示さず、誰も何も言わない。

「マスター。何か話してくれ。暇でしようがない」

そう言いながら女は少し見上げたが、初老のマスターは何も返さなかった。このようにマスターといえど、反応はない。完全に影になる日はそう、遠くないかもしれない。

女は黙り、じゃれるようにグラスを突付く。しかし沈黙は一分と持たず、女は薄い唇を開けた。

「そうそう。忘れるところだった。マスター、少年を一人知らないか？」

やはり返事はない。周りからの反応もなかった。女はもうそれを了解しているのか、一人続ける。

「長い金色の髪に華奢で白い体、瞳は翡翠色。見た目は少女のよう

らしい。まあこれは資料に記載されていたのを口頭で答えてるだけで、実物には会ったことはない」

女の放つ言葉の一つ一つをはつきりと発音した。機械でもこれほど明確に発音する人はいないだろう。それほど鋭利な声をしていた。「そしておもしろいことに、そいつは「コヨーテ」と呼ばれているらしい。意地汚い獣なのか、貪欲なハイエナなのか……。おかしい話じゃないか」

女は喉をくく、と鳴らしてマスターを見上げた。彼はようやく嫌々そうに彼女を見て、グラスを取り上げた。

「あんたみたいな女と話してる時間はねえんだ。とつとと帰んな」
「それはそれは。随分な言い方だ」
「ここも「ブラックアウト」に遭うかもしれないぞ？ そうしたらあんたみたいな女でも一網打尽だ」

ブラックアウト。その単語に女は眉をぴくりとかすかに吊り上げた。

「ブラックテクノロジーを消すための政策。ロットシャドウたちを一齐に焼き払う作戦」
「その通り。ひでえ話さ。血も涙もない。これが色彩の世界でやることか」

マスターはグラスを乱暴に拭き、割れそうな音を立てながら棚にしまうと「閉店だ」と少し腰の曲がった体を歩かせ、入口にある立て札をひっくり返した。

「閉店、か」

女はやれやれとため息を少し漏らすと、隣のスツールに置いておいた帽子とマントを手に持った。暗がりにあるそれらはまるで黒い塊のようだった。

女は立ち上がると、男たちよりも逞しい体をしていた。マスターは驚いたように女を凝視した。明るみに出ると隆起した腕や肩が訓練してできたものだわかる。女はマスターを見下ろすと、少し笑うように口元を歪めた。

「少しだけここが気に入りそうだったが、まあこれも仕方ないことさ」

女は硬直するマスター、閉店になったにも関わらず、煙草をふかして座っている男たちをぐるりと見渡した。

ゆるりと片手を上げると、口元はさらに歪んだ。紫紺の瞳が僅かな光源でも猛々しく輝いたが、何も映さなかった。女は誰も見ることなく、上げた手を下した。風の音が虚しく響き、女はつぶやく。

「グットラック。黒に落ちた事を後悔するがいい」

振り下ろされた手は横になびき、女は笑みを湛えて力強く吼えた。

「焼き払え！」

獣が咆哮を上げるような、けたたましい爆音。女の声と同調する。黒く沈んでいたバーが一瞬にして赤く、夜明けのオレンジ色に染まる。

「な……！」

バーのマスターは腰を伸ばし、一瞬にして起こった出来事を把握しようとしたが、真っ赤に膨れ上がる炎のせいで思考が働くどころか、体すらうまく動かない。

「何が起こったんだ……！」

マスターはがくがくと震える足を叩きながら女を見た。女は変らぬ笑みを浮かべながら、帽子とマントを着用した。マスターの目ははっと見開かれる。それを最初から確認しなかったことがこれほどまで悔やまれることになるなんて。

「その帽子の紋章……赤いマント……！！そうか……！」

赤く消えていく黒き腫瘍、赤い炎を背負う女、そして帽子に刻まれた剣に絡みつく蛇の紋様。

炎を纏い、マントが舞い上がった。マスターは全てを理解し、愕然と膝をついた。

「貴様……ラスティカの軍人……！」

「ロットシャドウ。本当にお前たちは腐ってるよ。少しでも心地いと思ってしまった私も腐ってるかもしれないが。……さあ、マスター。悔いるがいいよ。黒く染まってしまったことを」

女は手をかざした。それと同時にどこに潜んでいたのか、赤い軍服に身を包んだ兵士だちが続々と現れては火を吹き、剣をひらめかせ、血の花と炎のワルツを奏でる。

「中々お似合いの音楽じゃないか……やはりバーにはしつとりとした音楽が一番」

と、女は満足そうに鼻歌を歌い、兵士の一人から剣を受け取った。

「もう一度問おう、マスター」

艶やかに光る剣がマスターの喉元をかする。切っ先が通り過ぎただけなのに、彼の喉元は鮮やかな緋色の血を流していた。

「かわいいかわいい、コヨーテの存在を知らないか？」

「……………」

「イエス、ノー？」

炎を含んだ彼女の目が細く揺れ、口元からこぼれる歯は今にも食い殺しそうなほど光輝いた。

「し……知らん……！」

「それは残念」

剣がひらめいた。血しぶきが軽やかに宙を舞い、炎と共に消え去った。異臭は全て炎と共に焼き尽くされる。

「……………つかまらないものだ」

女はこと切れた肉塊を見下しながら振り返る。背にはブラックアウトの終えた兵士たちが集結し、剣を掲げていた。集団から一人の兵士が一步前に踏み出し、女の前に跪き、手を胸に当てた。

「エリエステス大佐、ブラックアウト完了しました」

「生き残りはないだろうな？」

「完全に葬り去りました」

「ご苦労。下がってよし」

「色彩の女王に栄光あれ」

「栄光あれ」

兵士がもとの集団に戻ると、全員剣を上げたまま「栄光あれ」と叫んだ。

赤く照らされる剣は黒を打ち消した証拠。黒き影がどす黒い赤血に溺れるのは色彩への忠誠。

マントが大きく翻る。女、エリエステスは声を張り上げ、兵士に手を振りかざす。

「引き続きターゲットを探せ！早急にだ！！」

遠くで誰かが泣いている。

色彩を、早く。世界を終わりに導く鍵を、早く。

レッドゾーン 2

かこん、と壊れた鈴が滑稽な音を立てた。狭い空間によんだ空気。煙草、酒、大麻・・・全ての空気が入り混じる黒いバー。石をひっくり返して覗いてみれば、そこは虫たちが集まる場所。色彩の世の中はどこにもない。

集う者たちはみな気だるそうに腐った色をしたビールを舐め、かびてもとの色がわからなくなったナッツを口に放り込み、面倒そうに黄色い歯をくちやくちやと動かす。

誰もが同じ動き、同じ匂い、同じ姿、同じ色。典型的な「黒」の場所だった。

ブラックテューマーという言葉が馴染んで数年経つ。

穏やかな世界の裏にはびこる暗い世界。無気力と殺意のはざまで揺れ、ひたすらに汚く日々を過ごす。目があればそれだけで血しぶきが舞い、それをみながら男たちはブラッディ・メアリーをあおる。肉の焼ける匂いでみんな酌み交わすのだ。今まで平和だった世界のしわ寄せはこういう風に生じていた。

それが当たり前になりつつある溜まり場に、突如現れたその光景は異様に映った。

それを見た者は口笛を吹き、にやにやと顎をさすり、ある者は何も言えずぽかんと口を開いたまま動かなくなる。無理のない話だろ
う。

年のころはまだ十代後半に差ししかかったというところか。鈍く光る蛍光灯でも輝く後ろで束ねた金色の長い髪、宝石をはめ込んだかと思うほど美しく、透明な翡翠色の大きな瞳。線の細い体や白い頬がひっそりと咲く小さな花のように「可憐」の言葉を髣髴とさせる。場がどよめくのも無理はないほど、見事な美少女だ。

翡翠の目が何度か瞬きをし、触ると折れてしまいそうな色白の小さな華奢な体が一步、一步、確実に前に進んでいく。腐った容貌をした男たちは食い入るようにその姿を目で追う。しかし少女は誰にも興味なく通り過ぎる。

あと少しでカウンターというところで、沈黙を破るけたたましい笑い声がとどろいた。

「あつはははは！！なんだてめえ？どっから来たんだよ、おじよーちゃん？」

風貌も腐りかけなら声も腐りかけ、痰の混じった低い声。それが引き金になったのか次々に腐った野次が飛び始め、歩んでいた足がぴたりと止まった。

「ここは俺たちみたいなくらく染まった大人が来るところだ。ガキは帰えんな！」

「それともあれか？ウリにでも来たのかなあ？」

「おじさんが相手してやるか？」

「おいおい、やめとけて！おめーいつから口り趣味になったんだ

よ！」

「それに男みてーにうつすい胸だし、楽しめねえぞー！」

まるで川が氾濫するように男たちは次々に口汚い野次を飛ばし、お互いの顔を見ては大笑いしビールをあおった。

ふわりと髪が揺れ、翡翠の瞳が少し陰った。長いまつ毛が虫のたかる蛍光灯でも美しく柔らかく光った。その可憐な姿を見て、さらに男たちは声のトーンを上げた。

「おいおい！泣いちゃうんじゃないか？」

「どれ、おじさんが慰めて……」

「ふざける、クソブタ野郎……」

空気が凍りついた。

男たちは時間という氷に包まれたように、それぞれ一瞬前のポーズで固まっている。そしてそのまま動かない。我が耳を疑って、動けずにいる。

その空間の氷結を無視するように金髪がふわりと舞った。

「ブダ共、俺に気安く話しかけんじゃねーよ。しかも」

棒切れのような足が床を蹴り上げた。細長い足が蹴ったとは思えないほど床は大きな音を立て、華奢な身体はその場から姿を消した。

その瞬間、ようやく男たちは氷から解放された。

「ど……どこだ？！」

全員、きよろきよろと探すがその小さな姿は見つからない。次に確認できたのは数秒と間を置いてからだ。

「あ」

男の一人があんぐりと、顎がはずれたように大きな口を開き、視線が皆同じ方向を見た瞬間、

「俺は男だ！！！」

男の真上に白い体と足の裏。気がつけば、小さな足は男の頭に見事、めり込んでいた。

間違いなく美少女、ではなく男は鼻を鳴らし、半眼で男を見下して唾を吐いた。一連の動作は女とは程遠く、男だとしても品がまるでない。しかも中指を立て、

「ふざける、ブタ共！」

もう一度唾を吐き、適当に机に置いてあったビール瓶を投げ捨てた。灰色の煙にアルコールと血と腐敗した匂いが入り混じり、辺りは余計に「黒」に沈んだ。

「そこまでにしてくれよ、パディ」

ようやくマスターが出てきて、いきり立つ男―パディの肩を叩いた。彼は毛を逆立てた獣のように肩で唸っていたが、諫める手で―先ず怒るのを止めた。瞳はまだたぎってはいるが。

パディは舌打ちすると眉間にしわを寄せ、いらだった半眼でカウ

ンターに付くと適当に飲み物を、と人差し指を立てた。

注文をしている彼を男たちは茫然と見ていたが、もう彼を茶化したり攻撃してきたりする人はなく、辺りは元の黒く沈んだ静けさに戻った。パディは静かになった店内に満足し、出てきたグラスに小さなくちびるを当てた。

「全く……今日も苛立つてるなあ、パディは」

「っせーな。腹立つんだよ、あのブタ野郎共。ろくな飯くってねーくせにぶよぶよ汚ねー太り方しやがって、目障りだっつんだ」

「そして……今日も口が悪い……」

「はん、これが俺なんだからしょうがねえだろ？何か文句あつか、ティティ」

まだ若く、優男風のマスター―ティティは少しやつれた笑みを浮かべ、グラスを拭いて自分も酒を飲んだ。

「だいたいなあ……最近いい食いもんがねえ！あいつら蓄えがあるだから食うなっつーんだ！あー腹減る」

「怒るとまーた腹減るよ。……確かに最近飯という飯が流れてこないね。アルコールはちゃんと来るのに」

そう言いながら空になったグラスを掲げ、もう一杯、自分とパディに注いだ。ゆるやかに光る水面を見つめ、ティティはうまそうに「く、と飲んでくちびるを舌で舐めた。

「最近ブラックアウトが多いらしい。そろそろここも危ないかも。この辺って、こうなってる結構年数経つし」

「だから最近人がいねーのか。飯も。ったく、軍人も暇だなあ……じゃなくて……今まで相当暇だったんだねえ、俺たち狩って暇つぶ

しときたもんだ」

「だーよなあ……。今まで平和だったからな。それはそれはもう狩りがいいだろうよ」

「それは結構なことだ」

二人は皮肉たっぷりの歪んだ笑みを浮かべてグラスを合わせて飲み干した。

「で、よ。妙な噂があるんだ。ブラックアウトになる前に必ず女が来るそうだよ」

「女あ？こんなところにか？」

「そ、女女。しかもけっこーいい女らしい」

「うげ。これまた暇なやつがいるもんだな。女は黙って子作りにでも励んでりゃーいいんだ」

「パディ。それは暴言ってやつだよ……。ほどほどにしないと。それに女はいいよ。俺は大好きだ」

ティティは満ちたグラスを元に戻し、うつとりと顔を緩めた。パディより幾分か年上のティティは女好きらしい。パディはこっそり舌を出した。

「尻に敷かれてひいひい言いたいティティに言われたくないね」

ティティは何も言わず、肩をすくめて自分のグラスを流しに置いた。

それと同時にただだろうか。軋む扉の音が店内に響く。すっかり黙ってしまった空間にその音は鮮明に響いた。たぎった男たちの目が一斉に扉に向かう。マスターであるティティはもちろん、パディも。

客は女だった。

黒い髪に藍色あるいは紫紺の瞳、隆起する逞しい体。ぴったりとしたスーツが体のラインをくつきり浮かび上がらせていたが、筋肉質な体のせいか色気というものは無い。女は帽子らしきものとマントを片手に持ちながら店内の真ん中を横断し、カウンターに向かう。先ほどのことがあったせいかな、男たちはみなざわつかずじっと見つめるだけだった。

女はふうむ、と鼻を鳴らすとパディの隣の隣に腰掛けて酒を注文した。

「やあ」

女は肘をつき、顎をあてながら横を向いてパディに微笑んだ。どちらかというところ凛々しい顔立ちのせいかな、さわやかな青年を彷彿とさせた。

パディは半眼をさらに半眼にし、それでもかた殺意を込めて女を睨んだ。パディはあまり友好的な性格をしていない。

「ああ、怖い」

女は目を細め、口を歪めた。それはどこかおちよくっているように見える。パディはますます眼光を強め、眉間に力を入れる。

「あんまり怖い顔をするなよ、ベリーちゃん？」

ベリー、すなわちかわいい子と言われ、パディの脳内が一気に沸

騰し、たぎっていく。目の前で見ていたティティは冷や汗を流しながらも、止めることができないでいた。

「クソ女、何が言いてえんだ、ああ？」

女は笑みを模るだけで何も言わない。それが返ってパディの神経を逆なでる。

「じろじろ見てんじゃねえよ、ケツの穴にグラスぶっこむぞ！」

「じゃあ私はお前の腹に剣を突っ込んでやろうか？……パディ・デユランダ」

「は？何で俺の名前……」

「突撃せよ！」

まるで空間そのものが引き裂かれたかと思うほど鮮烈な声で女は吼え、同時に世界が消えた。

白の世界、赤の咆哮。

そして数秒後、男たちの野太い声と肉が張り裂け、血のほとばしる音が悲鳴を上げた。

「な……！」

パディとティティは目の前に広がる光景を受け入れることができなかった。

突然入ってきた兵士、にやにやと笑う女、黒を引き裂く剣。一瞬にして阿鼻叫喚の渦が地を這う。それは文字通り、瞬く間というやつだった。ついていける者などこの場に女以外誰もいない。

「さて……」

女はちらりと横を見て、茫然とするパディに嬉しそうに笑った。

「探したぞ、パディ・デュランダ」

「……お前」

「ああ、自己紹介がまだだったな」

女はまるで昨日の夕食を思い出すように軽くぽんと手を叩くと帽子とマントを着用した。

燃え盛る炎の中浮かぶ赤いマントと禍々しくぬらりと光る剣に絡む蛇の文様。

パディは少し首を傾げたが、ティティはさらなる追い討ちをかけられたように目を見開いた。

「その紋章はラスティカの……」

さらに、はっと気づきティティは口を押さえた。

「赤のマントに女……。あんた……。まさか……。噂の軍人……。！」

「その通りさ、マスター。有名になったもんだ」

驚愕するティティと満足そうに微笑む女をパディは交互に見つめ、眉間のしわを深めた。どれ一つついていけず、苛立ちが募る。

「らすていかだか軍人だか知らねーけど、俺が何かしたってのか？」
「まあ説明は後だ」

女は少し笑みを消すと手を振り上げた。すると虫が湧くよに、い

つの間にか近寄った兵士たちが二人ずつ、パディとティティの両脇を掴んで取り押さえる。あまりに瞬時のことだったので、二人は成す術どころか逃げる事すらできず捕らえられてしまった。

一瞬呆然としたパディだが、すぐにいつもの暴言が飛び出し、華奢な体がこれでもかと暴れる。それは無謀なことだが。

「痛つてえ！！離せ、国のクソ犬共！犬は犬らしくへこへこ交尾でしてる！」

「おお、随分な口を持つてるねえベリーちゃん。かわいい姿をしてるのだからかわいいことを言えればいいのに。所詮はコヨーテというところか」

エリエステスは大げさな身振りで肩をすくめ、もかくパディに一歩近づき顎に手を添えると、無理矢理自分と目を合わせた。翡翠の瞳と紫紺の瞳が炎に揺らめきながら瞬く。これが歴史的瞬間だと、誰が気づくだろうか。

「パディ・デュランダ。私はラスティカ軍エリエステス・ランファル・フィルデフィラ。私の名において城まで同行願おう」

パディは捕らえられているにも関わらず首を動かさず手を振り払い、にやりと心底黒い笑みを浮かべた。

「は！いきなり来てこれか？来てください、て土下座してくれたら考えてやつてもいいけどな」

黙って成り行きを見ていた兵士たちは殺気立ったが、エリエステスはいたって平静にパディを見つめていた。そこには余裕の笑みが張り付いている。

「威勢がいいのは何よりだ。だが、パディ・デュランダ。私の言うことをちゃんと聞けば……そうだな。そのマスターの身柄を保証してやっていいんだぞ？」

ちらり、と二人は同時にティティを見た。ティティは何も言えず、ただひたすら顔を蒼白にして震えていた。

「好きにすれば？俺が無事なら何でもいいしー」

パディは鼻で軽く笑い、ティティに「俺のために死んで」と笑った。状況や台詞さえ違っていたら非常にかわいらしく、見るもの全てが虜になりそうなかわいらしい笑みを満面に浮かべた。もちろん、気弱なティティは気を失いかけた。

しかし、その攻撃にも似た笑みは無視され、次なる台詞がパディに降りかかった。

「中々バカだな、お前。……いいか？お前には選択肢が三つある。三つあることをまず感謝してほしいね。……そう、残された道は三つ」

目の前の柱が盛大な音を立てて炎に食われた。軋みながら悲鳴を上げ、床はどんどん侵食されていく。そんな中、彼女は涼しい顔をしながら人差し指をぴ、と立てた。

「一つ、大人しくこの私に連行される。二つ、いやいやでもとりあえず連行される。三つ……このまま焼かれて死ぬ。さあ、どうする？……パディ・デュランダ？」

炎が翡翠の瞳にくつきり浮かび上がる。それは現実の炎か、闘志の色か。パディは苦々しく舌打ちした。

「どちらにしても断れば炎に消え、受ければ私の気まぐれでお兄さんは助けてあげるよ。さあ、選べ」

紫紺の瞳が楽しそうに細く揺れる。パディ表情が一瞬消え、眉間のしわが少し解けた。歪めた口元はそのまま、憎らしげに言葉を吐く。

「……くそつたれ」

「それは一か二だ、と捉えていいかな？」

まあいい、と彼女は続ける。

「連行しろ！」

兵士の腕がパディの首筋を絞める。炎がより一層、禍々しく吼えてバーの隅々にまで轟く。赤くたぎる火と女のサイケデリックな映像を最後に、パディの意識は途絶えた。

真つ赤な赤い絨毯の廊下に硬質な音が静かに鳴り響く。足音は規則正しく、迷うことなく突き当りまで素早く進んでいく。それはしばらく続き、突き当りまで進むと、そこには蛇に縁取られた金色に輝く扉が構えていた。

蛇はラステイカの象徴、世界の象徴でもある。言い伝えによれば、この世は「蛇」でできているという。

蛇と色彩の女王、そして女王の父である神。

それが定かかどうか、真相を知る者は城に眠る。身動きできず、世界と同化しながら。しかしながらその事実が明るみとなるのは、数年先となる。

扉を軽くノックする。しかし返事はない。だがエリエステスは構わず声を張り上げた。

「ラステイカ第一軍大佐、エリエステス・ランファル・フィルデフイラです。ただいま戻りました」

軍人らしい抑揚のない声で言い、エリエステスは扉をくぐった。

部屋の中心に、白い円形の大きな机があるだけの寂しい空間。天井はドーム状になっており、世界地図が映し出されている。扉と同じく象徴である「蛇」が絡み付いていた。

ディスクには五人の老人と各大佐、中佐が揃っている。年老いた

者からまだエリエステスより若い者まで、老若男女揃っているが、エリエステスを友好的に迎える者は誰もいない。威圧的な視線を投げつけるだけで声もない。

しかし彼女は押されることなく、むしろ黙じみた威勢のいいオーラを突きつけながら一歩大きく踏み出し敬礼をした。ドームから降り注ぐ光は彼女に降り注ぎ、エリエステスは一層強く逞しく見えた。隆起する筋肉が照る。

「御苦労だった、エリエステス大佐。それで、どうなった？」

入口より一番離れた場所に座る人物は重い口を開き、両手を組んで睨むように前かがみになった。

「城に連行しました」

五人の老人たちが確認し合うように頷き合う。その他は何の感慨もなく、目だけで頷いた。

「予言通り、パディ・デュランダは存在しました。そして時期女王候補である「ウナ」も。鍵と女王、この二つさえ揃えば世界から黒い塊は消えるものかと思えます」

老人たちが嬉しそうに枯葉の口元を動かした。老人たちだけが何かを知っているようで、その他はやはり無表情だった。

「そのためには一刻も早く、鍵を使い女王の力を覚醒させます。引き続き、監視を続けます」

「了解した。よろしい、では下がれ」

「は」

エリエステスはもう一度敬礼をすると、機械的に後ろに振り返り、扉を開けた。

ブラックアウトで焼けた町の匂いが微かに風に混じり、彼女の鼻に届く。エリエステスは少し目を細め、笑った。

レッドゾーン 3

鳥の声なんて何年ぶりだろう。さわやかな朝を示すその音に、パディはうつすら目を開けた。

男たちの罵声、酒の腐った匂い、煙草の灰を焼き付ける異臭はどこにもない。黒いものはどこかへ消え去っている。パディは今よりもさらに幼い少年だった時から、黒い場所を心地いいと感じるまで浸っていた。そのせいか、恐らく通常の朝であろう白く清潔な朝は、ひどく新鮮に感じてしまった。

腐った匂いの代わりにノリの効いたシーツの匂い、木漏れ日から注ぐ光、おしろいをはたいたかすかな女の香り。部屋の空気という空気が白かった。

「あら、起きましたですか？」
「う………？」

パディは乱暴に目を擦り、ぼんやりと目を開けては閉じを繰り返

しもう一度目を擦った。

そこにあるのはいつも見る黒い天井ではなかった。クリーム色に染まった清潔な天井。所々に光の斑点が揺らめく。

パディは状況が把握できなかった。

少し動くとシートがしゃわ、と冷たく動き、羽毛の匂いがむわつと立ち上る。普段、どれもあるはずがないものだった。

パディは急いで体を起こし、布団を蹴った。羽毛のたっぷり入った布団は衝撃を吸収してしまい、少し上に上がっただけでまたパディの華奢な体に乗っかってきた。

「何をしてるんですか？」

「……誰だてめー」

パディはくらむ頭を抱え、指の隙間から声の主を見た。年はパディよりもやや年上だろうか。所謂メイドだった。紺色の制服に汚れ一つ、しわ一つついていない清潔な白いエプロン。木漏れ日にたっぷり光る大きくカールした茶色の長髪が印象的な女だった。

彼女はよいしょ、と声をかけながらゴミ袋を移動させると「あたしですか？」と首をかしげながら自分に指を当てた。

「申し遅れました。あたくし、パディ様のお世話を頼まれましたラミイ・ランと申します」

「……はあ？」

自分でも驚くほど変な声に、パディは言っただけで口に塞ぎ、き

よろきよると大きな瞳で辺りを見つめた。

ベッドが一つしかないところを見ると、一人部屋だろうか。パデ
イとラミイと名乗るメイドしかないが、かなり広い部屋だ。ティ
テイのバーの倍はあるかもしれない。

広いのは部屋だけでなく、ベッドも広い。あと三人は横になれそ
うだ。そして床には埃一つない赤い絨毯、磨き上げられた鏡台、使
われた痕跡のないタンスなどの家具。窓はガラスがはまってないの
ではと錯覚するほどキレイにふき取られていた。

パデイはあやふやな記憶の糸を辿った。いつも通りロットシャド
ウと化した男たちから金品を強奪し、いつも通りからかってきた人
を殴り倒し、ティテイと共に飲み・・・という日常ではなかったは
ずだ。

殴られたような衝撃と共に赤く燃える炎、そして炎よりもたぎっ
た瞳をした女を思い出した。

「…………お・も・い・だ・し・た・ぞー!」

すべり出るようにベッドから抜けると、目にも留まらぬ速さでラ
ミイの胸倉を掴んだ。

「おい!あの女はどこだ!」

「あ…………あれ…………だめですよ、いきなり押し倒そうなんて…
…あたしこれでも純情で」

「誰がやるか!ブタ共たちにまわされてろ!」

「まーひどい言い方。かわいいのに…………」

「全く、その通りだ」

パディは眉間にこれでもかとしわを寄せ、鬼のような（とはいえ、かわいい顔をしているのでそこまで見えない）顔をしてぐっと扉を睨んだ。白い日差しに隆起した筋肉が大理石のように輝く。勝気な笑みと鋭い目が不敵だった。

「やあ、お目覚めかな？パディ・デュランダ」

人をおちよくる、女にしては低い声。ぴったりとした青いスーツを身に纏った大柄な女、エリエステスは笑みをこぼしながら二人に近づいた。

「ご苦労、ラミイ」

「あ……え……エリエステス様！これはお見苦しいところ……」

ラミイは急いでパディから離れ、顔を赤らめもじもじとスカートを弄りながら後ろに一步引いた。エリエステスは、男だったらこれで女を一発で落としただろう、優しい中にもたくましさのある爽やかな笑顔を向けると「いいさ」とラミイの肩を叩いた。

「これから大変だろうけど頼んだよ」

「あ……はい！このラミイ、一生懸命働かせてもらいます！ではゴミ出しに行ってきます！失礼しました」

ラミイは俊敏な動作でゴミ袋を持つと頭を下げ、足早に部屋を出た。カールした髪が大きく揺れながら消えて行く。エリエステスはラミイの背を見守ると、口元に手を添えて嬉しそうに笑った。

「中々面白い子だろう」

「面白くねえよ！ここはどこだ、デカ女！」

吼えるパディにエリエステスは「おや」と目を見開き、姿勢を少し崩して腕を組んだ。

「まだ名を名乗っていなかったか？これは失礼。私はラステイカの第一軍に所属している、エリエステス・ランファル・フィルデフィラ。大佐だ。まあこれから長い付き合いになるのだ。気軽にエースと呼んでくれ」

「俺はここがどこかっつてのを聞いてんだよ！このモウロク女！何で俺がこんなところに……」

犬が噛み付くようにきょんきょんと、男にしては甲高い声で講義するパディに、エリエステスは余裕の笑みを浮かべながら片手を上げた。

「安心しろ。ちゃんと一つ一つ説明してやるから、まあとりあえずソファにでも腰掛けたらどうだ」

そう言いながら先に座るが、パディは警戒心むき出しのまま座るところか、その場から動こうともしなかった。大して気にせず、エリエステスは足を組んだ。

「突然のことで混乱するのも無理はないだろう。まず場所だ。ここはラステイカ城。そのゲストルームにいる。OK？」

ラステイカ城を知らぬ者はいない。色彩の女王がいる城にして、世界の中心。全ての出来事はこのラステイカ城から発信され、各国に伝わっていく。無論、パディもラステイカ城は知っている。真っ白で悠々としていて、いけ好かないと常々思っていた。まさかそんな所に連れて行かれるなんて夢にも思わないとはこのことだ。

「そしてお前がいる目的。……色彩の女王が死んだぐらい、お前たちロットシャドウも知ってるだろう？まあそのせいであんな薄汚いバーにいたのだろうけど。……薄汚くなったのだろうけど。……この世界は女王の力によって成り立っている。……OK」

「いちいち聞くんじゃないやねえよ！んなことは知ってるわ！とつとと用件を言え、三段腹！」

「これは筋肉だよ。……ああ、悲しきかな。脂肪と筋肉の差もわからぬとは。我が国の知能度を疑ってしまうよ」

エリエステスは大げさに首をふり、肩をすくめてわざとらしく人差し指を額に当ててため息をついた。

「う・る・せ・え！かみ殺すぞ！」

「はは、無理も大概にしろ。武器という武器はこちらで全て預かっているのだからな」

そう言いながら顔を上げると、目の前にパディはいなかった。エリエステスは笑うのを止め、すつと目を細めてその場に固まった。滴を落としたような静寂が訪れる。

「武器なんてなくてもなあ、あんたの首ぐらいへし折れるわ」

エリエステスの背後に立つパディを横目で見ると、エリエステスは鼻で軽く笑い「どうかな」とつぶやいて両手を背もたれに回した。

「私の首、そうたやすく折れない」

「試して……」

いない。文字通り、エリエステスの姿が消えた。まるで塵気楼の

ように、音もなく気配もなく風もなく。今まで相手にしていたのが幽霊だったのではと錯覚させるほど一瞬に。パディの心臓が高鳴る。呼吸を知らない魚のような息苦しさで襲われる。

「私を舐めるなよ、ハニーちゃん」

「てめ……いつの間に……」

形勢逆転。先ほどの事を再演するように、エリエステスがパディの背後に立っていた。振り返って見なくてもわかる、赤く猛々しい気配にパディは唾を飲んだ。

「女だてら大佐を務めてはない、ということを知ってほしい。さて、大人しく聞く気になったか？パディ・デュランダ」

パディは静かに汗を流した。本能が言う。こいつの放つ余裕は決して驕りではない。本物だ、と。藍色の瞳の奥に住まうのは、黒に染まったやつらの腐った強さやパディのように吼えるだけの強さではない。

殺しても殺しても、内臓を全て吐き出しても突き進んで相手の喉を噛み切ろうとする執念にも似たおぞましい粘着質な強さ。

エリエステスの手は下に降りているというのに、パディの細い首をへし折ろうと手がいくつも絡みつくような錯覚を覚える。

パディは一思索し、観念したように目を瞑るとソファに腰かけた。

「よしよし、お利巧だハニーちゃん。とびつきり甘いキャンディーをくれてやるっ」

「……黙って話せよ」

「……その矛盾、OK」

エリエステスもパディの向かいに座り、二人はようやくまともに顔を合わせた。

暗い、暗い、湖の底。

全てを封じ込め蓋をし、嚴重に鍵をかけた小さな箱。ゆらりゆらり揺れる人影が一つ。

私を見ないで、とじつと息を潜めている―意識という水の中で。しゃべってしまえば泡が地上に浮かび上がり、やがて秘密は全て公の場に曝される。

ひっそりと、ひっそりと、ずっと一人で孤独を食らう。思い出という愛しい記憶を暖めながら。

このまま、人として「死」にたいと、死んでいたと願いながら。

「女王が歌ってるわ」

「女王が歌ってるね」

「女王が泣いてるね」

「女王が泣いてるね」

「未来が見える？」

「まだ見えない」

「預言はずれた」

「いいえ、はずれるようにできていた」

「だから来る」

「そうね、来たわ」

「パディ・デュランダ」

一呼吸置いて足を組み替えたエリエステスは、珍しい生き物を見るように好奇心の入り混じった、それでも軍人らしい平静な目をパディに向け、口を開けた。

「突然のことで色々飲み込めないだろうが、話は簡単だ」

知っているかな、とおどけた口調はパディを苛立たせるのに十分だった。この会話に到達する前に、すでに数度怒りを感じているが、今は我慢しなくてはいけない。そうでなければ話は中々進まない。

エリエステスはわかっているのかどうか、不敵に笑みを湛える。

「世界は女王が維持している。世界が生きる力はもちろん、私たちが生きるための空気も光も何もかも、女王が生みだしている」

「そんなこと、生まれたての赤ん坊でも知ってる」

「ということは、女王が死ねば―世界は死に向かうということだ。現にお前のいたところはすでに黒く染まっていた。このまま行くと世界は確実に黒に堕ちる」

「はん……知ったこっちゃあないね。俺はあれが案外と心地いい」
「お前の意見は聞かないよ、パディ」

パディは軽く舌うちしたが、それ以上、食らいつくことはやめた。実のところ、食らいつけないのだ。

彼女の背後には禍々しい大きく獠猛な牙を持つ獣が控えている。パディの小さな体をいつ食べてやろうかと、かすかに笑う大きなものが―錯覚が見える。小さな獣の本能なのか、これ以上はやめると、見えない鎖がパディの全身を固定しているようだった。

内心でもう一度舌打ちするとしぶしぶ、しかし目を合わさないように彼女を見た。

「そこで欲しいのは次の女王だ」

「当たり前だろ」

「その通りだ。だが女王になるには力がなくてはいけない。この大きな世界を吊り上げるだけの力がな。……かわいいハニーちゃん。そこで問題だ。女王というのはどこから来ると思う？ 答えれたら美味しい美味しいベリーをあげよう」

「いちいち言動がむかつくんだよ！ 少しはまともな口調で言えねえのか」

「それを言うなら、お前もだよ。大佐に対する敬意とまではいかなくても、年上に対する敬意ぐらいは払ってほしいものだね」

「はん！ 無駄に年くつてるデカ女に敬意を払う必要はないね」

エリエステスは呆れたように背もたれに体を預け、何かをつぶやいたがパディには聞こえなかった。指で額を突くと、心底疲れた息を吐きだした。

「問題を出した私がばかだった。許してもらおう。では答えだ。……一般市民には知らされていないのだが、女王というのは血筋ではない」

エリエステスは顔を引き締め、前にのめった。重要な話なのだろうが、パディは興味が出なかった。気だるそうに構えたまま、次の台詞を待つ。

「一般市民から出るんだよ。普通の少女だった者にある日突然神の力が宿るんだ。預言が先か覚醒が先か……時期女王の事は巫女たちの預言により誰かがわかり、城に連れてくることになっている」

パディは足を組むと、ぴらぴらと軽く振り「それで？」と心底面倒そうに背もたれに倒れて耳をほじった。興味は出てこないままだ。それでもエリエステスは変わらぬ態度で話を続けた。

「巫女たちの言うことに、次の女王は「ウナ」という少女だということがわかった。すでに城にいる」

「そりやおめでとう」

「ありがとう。しかしその少女は心を開いてくれないのだ」

「へえ」

「だからお前が心を開け。それが私達がお前をここにつれてきた理由だ。OK？」

「……はあ？」

初めて二人の視線が合う。いつの間にかエリエステスは強気な笑みを浮かべている。

ボディーブローを食らったようにじんわりと言葉が広がる。パディはぐるぐるとその台詞を頭に回らせ、もう一度「はあ？」と素っ頓狂な声を上げた。

「ちよっとちよっと待ておいこら！」

パディは勢いよく立ち上がると、気持ちの中でエリエステスの胸倉を掴んだ。実際にそんなことはできない、と先ほど学習したからだが、情けなくもあった。それでも吼えることはやめない。

「何で俺がんなことしなくちゃいけないんだ！」

「私も同意見だ。巫女たちもなんでお前のようなやつを選んだか、さっぱりわからない。だがこれは全てお告げと預言によるものだ。

我慢しろ」

「どこのどいつだ！つれてきやがれ！」

「それが無理だ。まあすぐに会えるだろうから待て」

「何を言って……」

「まあ、聞け」

エリエステスは語気を強めると、眼光を鋭くパディを睨んだ。パディは息をのみ込むと、しぶしぶソファに腰を落とし、口を閉ざした。

「私とてこんな薄汚い……口汚い、どこのウマの骨とも知らぬやつに時期女王を預けたくはない。だが、そうお告げで言われてしまったのだ」

「んなもの、無視すりゃいいじゃねえか！そもそも、預言なんて曖昧なものに頼ってんじゃねーよ」

どんなにパディが吼えても、エリエステスの真剣なまなざしは変わらない。思わず気圧され、パディは言葉を続けることができなかった。

「……パディ・デュランダ。この世界にはまだまだお前たちの知らないものが潜んでいるだよ。ここは素直に従うがいい」

藍にも紫紺にも見える鋭い瞳が、パディをゆっくりと突き刺す。獣のようなオーラも相まってか、パディはますます反攻することができなくなった。一息吐き、髪をかきあげた。

「……俺がそいつと一緒にいて、万が一心開いたとして……それが何だっただ？力ってやつはあるんだろ？」

「それが残念なことに、次期女王には色彩の女王として完璧に覚醒

していない。心を閉ざしているせいだ、と言われている。その心を開くのがパディ・デュランダ王子ってわけさ。いいと思わないか？ たったそれをするだけでお前は王様気どりができるんだぞ？」

パディは軽く鼻を鳴らして片手を上げて、何かを捨てる仕草をした。

「はんつ。王？何寝ぼけてやがる。んなもんいらねーつつんだ」

「いいではないか。王になれなくてもウナという嫁がもらえるんだ。……そうそう。心を開くには何をやってもいいんだぞ？キスでも子を成しても、なんでも構わない」

片手を上げたポーズのまま、パディは硬直した。その場の色彩が消えたように、彼の周りが一瞬モノクロになる。

「どうかしたか？」

「じゃ、ねえ！子？！お前、おかしくねえか？」

「頭はお前より上等だ。おかしくはないぞ。心を開かせるにはやはりお互い好き合うのが一番だと思うがな。まあ孕ませるのは極端な例だったが、別に構わないんだぞ？どんなこともしていいと、そうなっている」

彼女の台詞にやはりパディは固まった。威勢のいいだけがとりえのパディもさすがにどう切り替えしていいかわからず、辺りはひっそりとモノクロに沈む。

「とりあえず顔合わせするのが先決だな。その他の質問は後で受けよう」

言い終えると同時に立ち上がり、訓練された動作で半回転し、扉

へ向かった。

「待てよ。俺はまだ「いい」とは言っていない」

「……言っただけだ」

立ち止まり、軋んだ音でも立ちそうなほど首がゆっくりパディに向く。獣に似た瞳が、獰猛にたぎった。

「私はお前にあの時、選択肢をやった。もう選んでしまったのだよ、パディ・デュランダ。今ここに選択肢は存在しない。もしあるとすれば……それは私の手によってその細い首をへし折られる以外何もない」

ぱちん、と軽い調子で指が鳴る。二人の目の前に、かつてパディ・デュランダと呼ばれた少年の肉塊が転がっている光景がフラッシュする。無論、幻影だがこの女ならやりかねなかった。

エリエステスは不敵で獰猛だが、話せる部分が多い。気さくで朗らかな部分も見え隠れしていることは、会話の中でわかった。

だが、奥に狂気が潜んでいる。それこそ、獣のように。

「逃げることなど許されはしない。これは非常事態なんだ。お前が死ぬだけで世界が救われるのならどれだけいいか。……さあ、これ以上無駄に話はしたくない。行くぞ」

パディは二秒ほど止まり、エリエステスの大きな背中を睨んだが、次には一歩踏み出していた。

日に照らされた廊下は、鮮明な赤と白で埋め尽くされている。埃一つない赤い絨毯と、汚れるということを知らない、キャンパス地の壁。ついさっき張り替えられたような真新しさを放っていて、落ち付かない。

「中々きれいなものだろう」

パディは自分が田舎者のように顔を動かしていたことに気付き、少し頬を赤らめて「うっせえよ」とくちびるを噛んだ。

「はは。まあそう恥じるな。城に来る、ということはまずありえないからな。黒に染まった連中はおるか一般市民も。城は世界の内部のようなものだ。そうおいそれと見せびらかすものでもないだろう」

パディは軽く鼻を鳴らし、一歩遅れて進んでいく。白い廊下がかもし出す静寂はパディの全身をむず痒くする。黒にどっぷり浸っていた体はアレルギーのように拒絶する。

パディは苛立ちを隠さず「まだか？」と半眼で訪ねた。しかし彼女は答えない。与えられた使命をまっとうするように、規則正しく前に進むだけだ。

「ここだ」

扉はパディがいたゲストルームの扉となんたいして変わらない、木でできたものだった。装飾もほとんどなく、彫刻も地味だった。それでも真ん中よりやや上に、ラスティカを表す剣に蛇の文様だけがぼつんとあつた。

エリエステスはおちよくっていた気配を消すと、軍人特有の無に近い機械的なオーラを身に纏った。

「エリエステス・ランファル・フィルデフィラだ。入るぞ」

凜とした声を張り上げると、音を立てないよう注意しながら素早く開けた。

その瞬間だった。ひゅん、と風が切れた。

エリエステスは髪をかきあげるように何事もなく、素知らぬ顔で頭を右に背け、その直後パディは硬直した。

金色の髪が妖精の粉のように数本、きらめきながら落ちる。パディは無言で首をさすった。冷たい感覚が残っている。振り返ると、あり得ないものが突き刺さっていた。

「……なんだ、あれ」

「あれは果物ナイフだ。重宝するぞ」

と、素面の表情を浮かべてさりとった。彼女の言うところの「果物ナイフ」は扉の反対―パディたちの後ろに刺さっていた。つまるところ、扉の向こうからナイフが飛び出し、エリエステスはそれを避けたがおかげでパディの耳元を通り過ぎ、後ろの壁に突き刺さったということだ。

パディが引きつりながら理解したくもないことを理解していると、さらに扉から悲鳴が飛び出した。男の声だった。姿は見えないがエリエステスはわかっているのだろ。う。呆れながら腕を組んだ。

「……カルア少尉。私はちゃんと見ているように頼んだつもりだが……本当に見ているだけだとは。真面目なお前も、ついに冗談が使えるようになったわけだ」

「ひっ……！エ……エリエステス大佐！」

悲鳴の主だろう。扉から男が転がり、飛び出し、震える膝を急いで起こしてバランスの取れない敬礼をした。

しわ一つない制服を不思議もなく着こなす姿から、清潔な貴族の匂いがした。顔つきもいかにも甘く、体は一応鍛えてあるようだが、エリエステスよりも柔らかい体をしている。金にも見える薄い茶色の細い髪が軽くカールし、甘いマスクを一層引き立てている。おそらく一般に受けそうなハンサム、というやつだろう。真面目そうな青い瞳の奥が、今は震えていた。

カルアと呼ばれる少尉はもう一度姿勢を正すと、申し訳ありませんでした、とものすごいスピードで謝罪した。よほど恐怖なのだろう。

「エリエステス大佐……！これはその……」

「言い訳はいい。どうせウナ様なのだろう？また噛み付かれたな……」

エリエステスは少し体を崩し、前髪をかき上げながらちらりと視線を落とした。パディも覗き込むように彼女の視線を追うと、カルアの手に止まった。彼の白い手袋には、くつきりと歯型が残っている。どうやら、ウナという人物が噛みついてたらしい。

ウナというのは時期女王の名ではなかったか。一抹の不安がよぎる。

「油断はするなと言ったはずだ」

「申し訳ございませんでした……。あの、後ろにいるのは」

「ああ、噂のパディ・デュランダ君だ」

エリエステスにはやりと笑い、後ろで口をへの字に曲げているパディをひよいと、軽々摘み上げてカルアの前に放り出した。

「これが、ですか。パディ・デュダダは男と聞いていましたが……女だっ……ぐあ！」

「ご、と岩がぶつかるような鈍い音。きらめく金髪がカルアの眼前で揺れた。

「ち・か・よ・る・ん・じゃ・ねえよ！俺は男だ！」

カルアは呻きながら頭を押さえた。なんてことない、カルアの顔が近づいてきた瞬間、パディは思い切り頭突きをしたのだ。予想しなかった動きだったのか、エリエステスも目を見開いて止まった。

だが次の瞬間には腹を抱えて大笑いをしていた。

「あつはははは！やってくれるね、パディ・デュランダ！」

「んだよ！」

「いい度胸だ、と褒めているんだ。軍人を攻撃するやつがいようとは……いや、ロットシャドウも中々いい。無知を知らぬというのは何ておかしいことだろう」

パディは半眼をさらにきつく尖らせ、下から上に舐めるようにエリエステスを睨みつけた。

「うつせえぞ！」

「いや、褒めているんだよ。私にしては褒めている方だ。……さて、お前が今頭突きを食らわしてうずくまっているこいつは同じ第一軍に所属している、カルア・アス・ストレフスキ少尉だ。これでもいいところの子さ」

「はっ！いいところのぼっちゃんだから、うずくまってるんじゃないの？」

「……失礼なやつだな……！」

カルアはふるふると全身を震わせてゆっくりと立ち上がる。相当痛かったのか額を押さえて。

「大体なんだ！いきなり頭突きとは……！それにその口調！どうにかならないものかつ」

「うつせーな。大体俺を女とか言った口がぴいぴい言うんじゃないよ。はん、貴族のぼんぼんっーのってみんな頭とろけてんの？脳みそはさぞかしおいしーいプリンの味がするだろうよ？いや、あんたの髪からしてシュークリームか？」

パディは皮肉たっぷり込めた笑みを浮かべ、鼻で笑いながら人差し指をくるくると、カルアの頭に向けて回した。無論、言葉の意味と裏にある意味もわかる。言っている間にもカルアの顔はみるみると赤くなり、終わるころにははちきれて飛んでいきそうなほど赤く腫れていた。

「ぶ、侮辱だ……！許さん！」

「カルア少尉」

腰の鞘に触れそうになる手を、エリエステスは冷えた声で制した。

「遊びはここまでだ。それにパディは一応ウナ様の鍵だ。多少丁寧に扱ってくれ。多少、な」

「……はっ」

エリエステスの声はよほど冷えていたのか、カルアの顔は先ほどとはうって代わり、顔色も表情も冷静さを取り戻した。パディは軽く「ひひ」と意地の悪い笑みを浮かべたが、もう相手にはしなかった。

「……まだまだ未熟でした」

「わかればいい。さあ、パディ。入れ」

カルアは舌打ちしたそうな口を歪めると、パディに道を開けた。パディは二人に中指を立てながら入ったが、部屋の装飾に目を奪われて殺意も敵意も消えた。

まるでおもちゃ箱をひっくりかえしたような原色のパレード。床も天井も壁も全て、色とりどりで目がつぶれそうなほど鮮明な色を放っている。重鎮の部屋というよりも、これでは子供部屋だ。現に、床にはいくつものおもちゃらしき物体が転がっている。

そして、その中央に彼女はいた。まだパディと変わらぬ少女だった。これだけの極彩色の中、唯一黒いローブを纏い、体を隠している。思いのほか華奢だった。

ゆっくりとそれは振り返る。鈴の音がしそうなほど、薄い色素の髪が揺れた。

女王候補と女王の鍵。二人が出会う、歴史的瞬間。だが、パディ

の胸には嫌なざわめきがあった。そしてその予感はその瞬間、的中することとなる。

少女の、ガラスのような瞳が艶やかに光り、入口で固まるパディを捕らえる。そして形の良い小さなくちびるがゆっくり開いた。

「死ね」

後に語り継がれる書物にはこう、書いてある。

どうして歴史の重要シーンは全部口汚いのであろう。感動的とは言わないが、せめて普通の対面であつたら。歴史の進みはもう少し楽に、そしてスムーズに進んでいたかもしれない、と。

不自然な沈黙が膜を張る。空気をやぶったのは、意外にもパディだった。目を瞑り腕を組み。口はこれでもかと平たく引き伸ばされ、端は痙攣している。一目見て誰もがわかる「怒り」と「呆れ」そして「焦り」の顔だ。

パディは艶やかな髪を揺らすと、もう一度鼻で笑いを飛ばした。

「で、どれが王女だつて？」

パディは目を瞑ったままだったが、目の前にいるエリエステスはこちらに振り向き、何の混じりけもない、爽やかすぎる眩しい笑顔を浮かべている、というのが見えた。現実も同じく、そして声も明るい。

「はっは。そうして目を瞑っていたら見えるものも見えないぞ？」

言い終えると同時に、パディの口はさらに引きつり、エリエステスの笑みはさらに深まった。

「いい、目を開ける必要はねえ！ここに居るのは俺、あんた、ぼんぼん兄さん、なんかいるアレだけ。こんな限定されてる中、開けなくてもいいだろ？OK？」

「はっは。私の口調が早くも移ってるな、パディ・デュランダ。でもまあ、未来の嫁なのだからしっかりと目に納めてくれなくては」

「だから、いいって」

「遠慮はいけないな」

「あの……………」

二人のやり取りと表情を交互に見ていたカルアが、ようやく口を挟む。妙に場に浮く白い手袋が虚しく宙を彷徨う。顔は戸惑い、次の言葉に迷っているようだ。

おろおろするカルアに二人は同時に向き、「ん？」とそのままの表情で向いた。

「時期女王のウナ様でしたら目の前に……」

「うわあああ！クソ真面目に現実を突きつけるんじゃない！」

「はあ？」

パディはここに来て初めて感情を思いつきり吐き出した。

レッドゾーン 5

女王、と聞けば誰もが威厳と美麗をかもし出す、優美な姿を想像するだろう。人形よりも生きた、生きている人間よりも異質な、素手で触ってはいけなような肌と髪を持つ人間にして人間ではないような、奇異な人物。それが女王。

黒に沈んでいたパディもそれぐらいの想像と、少々の隠し味である憧れを持って、女王とはいかなるものかと頭の中に「形」を持っていた。

しかしそれは一瞬にして粉々になり、大気に還っていった。

「……………嘘だろ……………」

その人物は確かに、女王と呼ばれるような年齢ではないかもしれない。威厳も荘厳も感じられない。異質な空気はあれど、パディの思う女王とあまりにも違う。違い過ぎる。

けれど、一瞬でも眩いオーラを見せたのは気のせいだろうか。そこにいるのは女王と呼ぶにはあまりにも遠い位置にいる人物だった。

まず、何かの塊のようだった。それは目深に被ったフード、くすんだ色をしたワンピースのせいだろうか。パディよりも華奢な体つき、棒きれのようにやせ細った手足。フードからこぼれる髪は短く、色が薄い。しかも整えていないのか、目が片方隠れている。辛うじて見えるもう片方の目にも光は見当たらない。

年はパディと同じぐらいだろう……………その年頃の子というのは、もう少し瞳に輝きがあるものだ。現にパディも文句は言えど、光りは強い。だが、その人物に光りはほとんど差し込んでいなかった。太陽の祝福を忘れ去ったように、どろんと目を伏せている。

機械仕掛けの人形のように、次期女王候補はゆっくりと顔をパディに向けた。パディを見ているらしいが、本当に見ているかは怪しい。

その歴史的出会いに、誰もが冷や汗を流した。

「……………」

パディは目を見開くのをやめ、これでもか……………それでも小型

犬が牙を向く程度の威嚇をしたが、女王候補は見つめたまま微動だにしない。

空気が動く。気配が流れ、女王の口は開かれる。

「死ね」

全員が再び硬直した。

「死ね」

たった一人を除いて。

「死ね」

パディは先ほど見せた、怒りとあきれと焦りの表情を浮かべた。口はこれほどまで広がるのかと、驚くほど平たく伸ばし、引きつけた。今はそれしかできないのだ。

「……おい、筋肉女」

「……エースでいい、と言ったはずだ」

「……エース」

「何だ？」

「……これはこいつの鳴き声か？あ？」

「死ね」

エリエステスから、わざとらしく乾いた笑い声が耳を掠める。

「何を言ってるんだ、パディ・デュランダ……鳴き声というのは我々のように言葉を発せぬ動物が上げる声のことではないか？」

「死ね」

「……俺もそう思ってたはずなんだがな……」
「死ね」

数度目かの沈黙。パディもエリエステスも、おろおろしていたはずのカルアも硬直して、女王候補の存在を視界から消した。誰だつて認めたくない現実の一つや二つある。

「死ね」

「ぐあああ！う・る・せ・え！」

またも女王候補の口が開かれたと同時に、パディの頭は限界に達した。甲高いはずの声は低くぐもり、肺よりもずっと下、腸あたりから、全身全霊の声という声を吐き出す。パディなりの全力の否定だ。

「何なんだよ、てめーら！あ？全員そろってクソか、死ね！むしろクソの中につっこんで死ね！」

「はは、パディ・デュランダは近くにいた人の影響を受けやすいようだな。もうウナ様の口調が移ってるぞ」

「移ってねえよ、この筋肉女！これは一体何なんだ！」
「は……」

二人が無理矢理引き裂いた、沈黙というベールが粉々になったせいか、固まっていたカルアも時間を取り戻し、体を一瞬振るわせる。同じように文句を言えばパディも収まったかもしれないが、カルアは至極まともに言ってしまった。

「貴様！パディ・デュランダ！大佐やウナ様に向かって、なんて言う口を！」

「うつせえ、プリン男！てめーは大人しくコレに食われてる！」

これ、というのは言うまでもなく女王候補・ウナのことである。一応でもウナは女王候補という世界の柱的存在になりうる人物、国といわず世界からも優遇される身だ。大真面目にしきたりを重んじるカルアにとってその扱いは、許されるものではない。顔を真っ赤に腫れあがらせ、甘いマスクを崩して吼え続ける。

「ききき、貴様……ウナ様が一体どれだけ重要人物か……」

言い終える前に、間接が痛くなるような、鈍い音が届く。

「あ」

パディの声とエースの見開きが同時にカルアを向く。

カルアは事態が飲み込めていないように、そのままの姿勢で瞬きをする。赤い顔は消え、代わりに青い色素がみるみる顔を浸す。

「……………」

カルアはゆっくりと、視線をずらす。首から軋む音が聞こえてきそうなほどゆっくりと、慎重に。

「まずい」

「……」

カルアはその場に倒れこむようにしゃがんだ。

「まずい」

ウナはもう一度つぶやくとペ、と吐き出すようにカルアの手袋を吐き出した。うずくまるカルアの手にはくつきりと歯形が浮かび、うつすらと血を帯びていた。その歯型は間違いなくウナのもので、当の彼女は飄々と明後日の方を見ている。

「……エース。こいつは肉食か？俺は餌か？ああ？」

「まあ、あながち間違っではないが……ウナ様は肉は食えど決して人間を食うなどということはない。それは人間と共通だと思うが」

「……じゃあなんでこいつ、このプリン男を食ったんだよ」
「食ってはいない。噛み付いただけだ。癖なのかカルア少尉が好みなのか……」

冗談混じりの声に嫌気を覚え、パディは顔をそむけた。その拍子にウナと目が合った。光のないウナの瞳はパディを捉えているかどうかはわからなかったが、顔の位置を変えずもう一度「まずい」とつぶやいた。

「そういえば、先ほども噛まれたようだったな。はは、色男は辛いところだなあ、カルア少尉」

「はん、本当にプリン男だったんだなあ……」

カルアはぐつと顔全体にしわを寄せ、パディを睨むが通用しなかった。パディは軽く失笑してみたが、それ以上怒りを噴出さなかった。ずっと立ち上がり、手袋を拾う。平静そのものといえばそうかもしれないが、意気消沈したような、衰えたような気配があった。

「……エリエステス大佐……そのような言い方は止めてください……」

「おやおや、気に食わなかったか？それは謝ろう、カルア少尉」

カルアは何か言いたそうにエリエステスを上目に見たが、結局何も言わないまま、一步後ろに引いて背筋を伸ばした。途端に軍人特有の、置物のような姿に戻るのをエリエステスは横目に入れると、軽く笑ってパディに向きなおした。

「さて、おふざけもここまでにしよう……とはいえ、ウナ様は見ての通りのお方だ。先ほど説明した通り、ウナ様の心を開いてほしい」
「NO、と言ったら？」

「選択肢はない、と言ったとおりだ。ここでもお前に選択する余地はない。……さて、互いに自己紹介でもしようか」

エリエステスはたくましい足を一步踏み出すと、パディとウナの間に入った。

「ウナ様。こちらが新しい遊び相手のパディ・デュランダです。気軽に、適当に、まあ体が壊れない程度に遊んでやってください」

「おいおいおい！ なんだよ、その説明……」

「ぴいぴいうるさいぞ、ハニーちゃん。そしてこちらがウナ様。訳あって、心は閉ざされている。少々……曲がった育ち方をしているのだな。まあウナ様の過去は本人に聞けばいい。さあ、握手でも」

かちん、と歯が鳴った。エリエステスは笑顔のままウナを見ると、彼女は獣のように歯をむき出しにして、かちかちと何度も歯を鳴らしていた。それは獰猛な生き物が見せる威嚇の姿を、丸写しにしているように見えた。

「……まあ、こんな感じのお方だ。仲良くやるように。くれぐれもお互い、傷つかないように」

「無理があるだろ……それ……」

エリエステスは何の反応も示さないまま扉へ向かった。

パディは文句を言いたくて口を動かしていたが、あまりに突然、あまりについていけない展開に言葉は消えてしまい、判断するとう能力をも失って、ただその場に立ち尽くした。

誰もしゃべらなくなった部屋では虚しく、ウナの歯の音が、急ぎ立てる秒針のように鳴り続けていた。

金に縁取られた蛇からまる扉の奥。両足を抱えなくなるような、ぬるま湯に似た沈黙がゆるりと流れる。

つい先ほどまで人がいたのだろう。揺れる気配は、人がいた時よりも濃密な匂いを放つ。誰もいないはずだというのに、耳元で誰かが囁いている気がしてならない。これが色彩の女王の息吹であれば、目を閉じてそつと味わうだろう。だが女王はもういない。

亡くなってもう大分経つ。というのに、女王の匂いは未だあちらこちらに染みついている。見渡せば女王が飛び出てきそうな、そんな妄想に駆られる。

エリエステスは目を細め、マントを翻し、振り返る。無論、誰もいない。あるのは世界の地図だけだ。

世界の中央位置する「ラスティカ」。最も女王の加護を受けた最も美しい国。それが今は黒い斑点が浮かびつつある。狩っても狩っても、世界の黒化は防げない。

一つ一つ、虫のように蠢いて大地を蝕もうと溶解液をたらし、這いずり回る。

女王がいない世界。色が消える世界。

「……何とかしなくては」

エリエステスの瞳の奥底に、「戦」の字が炎のようにちらりちら

りと赤く、青く、火の粉を噴出して笑い―嘆いていた。

どうか、このまま。私を人として殺して、エリエステス―。

レッドゾーン 6

「……は……」

気がつけば途方もない時間が過ぎているような、と気付いたのはエリエステスが出て行って、数時間経ってからだった。

仕方ない。突然城に連行され、訳わからないうちに時は過ぎ―よくわからないものまで押しつけられた。

パディは目を一回思いつきり見開き、辺りを見回した。

壁には所々赤茶色のような染み（何かどうかというのは考えたくない、とパディは本能で叫んだ）、所々傾向ピンクや黄色を用いた星や花などの柄、黄緑色とオレンジ色がストライプに織り交じる絨毯の上には食い散らかしたパン、おもちゃらしきぬいぐるみや人間を模った人形、本やエンピツなどころがっている。改めて部屋を見直すと、他の部屋や廊下に比べて色鮮やかなのに淀んでいた。

それ以前に、この部屋は少女が住まう部屋としては子供過ぎる。ウナは恐らく、パディと同じ年齢―つまり、十代後半であろう。対し、部屋は幼児というより赤ん坊が暮らすような内装だ。

一体どうした扱いを受けているのか。ウナは文句言わないのだろうか。いや、そもそも少女に人間らしい感情があるのだろうか。全てが不思議だ。

パディはウナをねめつけた。彼女は目を瞑ってたが、寝ているようではなかった。瞑想、というような状態に似ている。意識がはっきりしているのにどこか低迷している・・・そういった感じだった。

パディは、いつのまにか腰を下ろしていた体を起き上がらせると、ウナに背を向けて扉へ向かった。

後ろで目を開いた気配はない。パディを呼び止めることもしないらしい。

一体何なんだ。畜生、を何度も心の中で呪文のように何度もつぶやくと扉を開けた。

「お」

「あ」

パディはそのまま硬直し、交わる視線の先・・・カルア少尉をしばらく見つめた。突然のことでお互い言葉が中々出なかったが、カルアは瞬きを一つしただけで「ああ」と息を漏らしながらつぶやいた。

「……パディ・デュランダ。どこに行くつもりだ」

「見てわかるだろ？帰るんだよ、プリン男」

プリン、の単語にカルアは神経質そうに眉間にしわを寄せたが、もう耐性がついてきたのか、軽く咳払いして眉間を揉みほぐすと、

もう一度「どこへ行く」と聞きなおした。

「今言っただろ？耳クソたまりすぎなんじゃね？脳がプリンで、耳はクソオンパレードかよ、きったねえな」

「……君はいちいち挑発しなくては会話ができないのか？言語障害者とみなして病院に送り込むぞ」

「はん」

パディは軽く息を漏らすとあざけるように口を引き上げ、肩をすくめて上目にカルアを見つめた。

「その方がよっぽどいいね。こんなところにいるより病院のベッドの方がよっぽど落ち着く」

「なら帰りたいまえ……と、言いたいところだが。生憎、君の帰る家……というか町か？は、もうない」

パディはもう一度同じ息を漏らしたが、もう嘲りは消えていた。その代わり、無だが、限りなく赤に近い炎を灯した瞳がざらりと閃光を放った。

黒い町が赤く消える瞬間は、意識を失う前に見た。元々色彩のない町だ。未練はない。

「んなこと、知ってるに決まってるだろ？俺たちはブラックアウトされてサヨウナラ」

「じゃあどこへ行くつもりだ？君がどこかに行くというなら、僕は全力でとめなくてはいけない。エース様の……」

言いかけて、カルアの顔がはつと青く染まったかと思えば、次の瞬間赤く火照っていた。ころころ顔色の変わるやつだ、とパディは

ため息混じりに心の中で呆れ、髪をかきあげた。しかもこのタイミングで何が起こったか、理解できない。だからといって特に興味はない。

しかしカルアはあるようだ。震える手をパディに伸ばす。

「おい……君」

「は？」

「その……」

妙に齒切れ悪く、興味のないパディとしては「どうした」と聞くよりも苛立ちが専攻する。だが、やはり面倒なのでとりあえず待つことにし、カルアもようやく口を開いた。顔は赤い。

「その……だ……。今僕が言ったことは忘れてほしい……」

「はい？」

パディは眉をこれでもかと引寄せて曲げ、何か吐き出すように口をひん曲げてもう一度カルアを睨んだ。

「何のことだよ」

「いや……聞こえなかったならいい。……エリエステス大佐に君をここに留めておくよう、指示されている。君がどの出身でどういう身分であろう、仕方がない。時期女王を目覚めさせる鍵だからな」
「うっせーよ、何が鍵だ。第一、なんだよコレ！」

女王を目覚めさせるための、だから鍵。だが、パディに身に覚えはまるでない。

そもそも、黒く染まった所を抹消するために殺戮まがいのことを

する軍人たちが、どうして黒の住人であるパディを迎えにくるというのか。これは所謂矛盾というやつだろうか。

パディはさらに苛立ち、歯を食いしばった。加えて、与えられた「女王」が肉食獣の如く、意志さえ通じぬ少女とは。

「何をどうすりゃあいんだ！肉でも与えておけば大人しいのか、ああ？」

本人は威嚇しているつもりであろう、黄色い悲鳴を、カルアは横目に聞いていたが、少しだけ姿勢を崩すと「パディ・デュランダ」といつになく低い声をぼつりともらした。その表情にはやや「諦め」という感情が混じっているようだった。

「何度も言うが、ウナ様は時期女王なんだぞ。もう少し丁寧な言い方で言え。……僕の方が聞きたいくらいだ。どうしてお前で、ウナ様はこうなってしまうれたか……」

「第一、誰が俺だなんて言った？」

「エリエステス大佐から聞いてないのか？巫女様から……」

「聞いてねえよ！そいつはどこだ？！」

「ちょ……待ち……」

「うるせえ、遅い！自分で探しに行くつ。こんなところ、いれるか！」

蒼白な顔になりつつあるカルアを振りほどき、パディは廊下の奥へと駆け抜けた。狂った部屋にいつまでもいる気はなかった。

残されたカルアはパディを追いかけてようとしたが、ウナを常時見守っていなければいけないため、しどろもどろするだけで動くことができなかった。結局、その場にうずくまると、逞しい女軍人、頼

れる上司の姿を思い浮かべ「エース様……すみません」と深くため息をついた。

走っても走っても走っても白い廊下が続く。その場をただランニングしているように同じ景色が何メートルも続き、パディの額に汗よりも濃度の濃い、脂汗に似た冷や汗が流れ始める。

扉もどれも同じに見えた。どれも同じ細工、色、風合い。夢の中で永遠に続く回廊のように廊下は続き、パディはその場で叫びだしたくなる気持ちだった。

「ああ！畜生……」

徐々にペースを緩めると、元の歩く速度に戻し、頬の汗を乱暴に拭った。

飛び出してきたしまったはいいが、どこにどういけば「巫女」というものに会えるかパディには全く想像できなかった。それでも走りたかったのは、どこかに行きたかったのは、無理矢理連行されたパディには仕方のないことである。

パディは煮え立つ血を押さえ、何とか冷静に思考を回す。巫女様というものがどういう人でどこにいるか検討つかないが、通常の部屋にいないことは確かだろう。だが、廊下は行けども行けども同じ扉ばかり連なっている。

畜生、と再び毒づいて舌打ちでもしたいところだったが、その気

力も萎え始めていた。今頃になって疲れが生じているのだ。

「あら……パディ様？」

呑気な声に、不意に疲れを忘れる。振り向くと、フリルのついたエプロンとたつぷりとカールする茶色い髪が見えたが、それだけでは誰かは判断できなかった。視線を動かし、顔を上げるとそこには目覚めた部屋で一番に出会ったメイド、ラミイが立っていた。

「どうしたのですか？一人で……あ、迷子ですかあ。そうですねえ、あたしもよく間違えますから」

ラミイは人懐っこい、ころんとした笑みを浮かべて柔らかく目を細めた。慈愛とも取れるその顔は、今のパディには逆効果だった。彼は眉間にしわを寄せ、凄みを利かせた深い声でラミイを睨んだ。とはいえ、パディの外見は愛らしいと言えるため、ラミイは笑みを崩さなかった。

「うつせえな、迷子じゃねえよ！」

「はあ……では、何かお探しですか？」

「そうだ。巫女とやらを探してるんだ。部屋はどこにある？」

「はあ、セロ様とラス様のことですかねえ？」

「そう、多分それだそれ。早く言えよ、そいつの部屋の場所」

「はあ……。もう少し進んだところの一番最初の角を右に折れて目の前にある大きな扉のさらに奥にある扉の向こうですが……」

と、ラミイが言い終わると同時に、パディはその場から走り去った。余韻だけがエプロンを撫で、ラミイは髪を押さえて「賑やかですわね」と呑気な声を送った。

預言をいたしましょう。

近い未来を見せましょう。

私にとってほんの一秒の間。あなたにとっては長き牢獄。

預言をいたしましょう。

パディ・デュランダ。色彩の鍵。赤き軍人、エリエステス。女王を受け継ぐ者、ウナ。

世界はやがて深い黒に落ちるでしょう。女王は泣くでしょう。子供たちは飢えるでしょう。大人たちは欲を燃やすでしょう。

でもそれは私にとってほんの一秒の間。

やがて暖かき日々が訪れるでしょう。

私が眠る一秒の間に。それぞれ出会い、別れ、争い—そして世界は、生まれ変わる。

レッドゾーン 7

大理石で固められた白い空間に浮かび上がる木造の扉は、レースのように鮮やかな細工が施されていた。

荘厳なメロディーでも流れれば、舞踏会が開催されているかと勘

違いするかもしれない。パディ汗を拭いながら、しばし扉に見惚れた。これでは今まで見てきた扉たちなど、この扉の間では単なる板切れに見えてしまう。

ほのかに輝いて見える扉の中央に、レイストロの全景が描かれている。しかしその絵は小さく、ピンポン玉のように軽く見える。その周りに大きな手があった。しわの一本一本まで彫られたそれは、人の柔らかさと体温を持っているようだった。手はレイストロを包み、反映をもたらすように掲げられている。さらには、イバラのような線の交差、大蛇のうねり、剣のような杖が光り輝いている。

まるで物語のページ。意味はわからないが、誰かが耳元で囁くような気がした。

——それは後に、女王と世界を繋ぐ物語だと知ることとなる。そこからだろう。世界は黒く、暗く、悲しい未来と、変わらぬ宿命で動き続けると、理解するのは。だがこれは、まだまだ先の、終幕の話だ。

パディはしばらく立ち尽くし、頭を振り、扉を力いっぱい押した。向こうにもう一枚扉がある。パディが入ってきた扉からもう一つの扉まで、距離はそうない。精々二十メートルくらいだ。

扉を閉めると、途端に暗闇が広がる。電気が通っていないのか、そこに光りは存在しない。湿気と、カビの匂いが鼻をつく。窓すらそこにはなかった。

指先すら見えぬ暗闇も臆することなく、大股に進む。黒は慣れて

そのままもう一枚開けると、霧のように白い靄が足元を伝わり、パディの頬を撫でて手招きした。

「……………」

いつの間にか緊張していた体に活を入れると、パディはいつもの調子でずかずかと入っていた。

廊下と違い、そこはうつすらだが電気はついていていた。静けさはない。ごうんごうん、と低い唸り声を上げて何かがゆっくり回転している音が反響する。

何かに躓き、足元を見る。色取り取りの線―何かの回線だろうか。回路だろうか。土に根が這うように、コードがいくつも埋まっている。だが、スモークのせいでもどこからどこまで繋がっているか、わからなかった。どうしてこんなものがここにあるのかも、わからない。

ようやく慣れた目であたりを見回し、驚いた。そこは大きなドームのようだった。湾曲した天井、広々と開けた空間。階段は上っていないから、恐らく一階……だと言うのに、天井から柔らかな光が降り注いでいる。

そして中央にしゃがみこむ一人。

ウナの件もあり、パディは敵意や殺気を振りまいたが、それが跳ね返されることも買われることもなかった。

「ようやく来たね、パディ・デュランダ」

「待ちくたびれちゃったよ、パディ・デュランダ」

「!？」

唐突に響いた声にパディは肩を震え上がらせた。声の主は無論、中央にいる人物しかない。彼、もしくは彼女―中世的な姿はどちらかわからないが、声はきちんと男女の声で聞こえた。そこが問題だ。ここにいるのは一人なのに、どうして二人。

驚くパディがおもしろいのか、目の前の人物はひっそり笑った。

「ようこそ、パディ」

「ようこそ、パディ」

反響するであろう、ドームの中だというのに、凜としてぶれない声。男の声はまだ幼さは残るものの、水のように静かな声、女のほうは少し好奇心の混ざった、屈託のない透明な声。どちらにしても今までで聞いたことのない不思議な声だった。

蜜に誘われる蜂のように、ふらふらとパディは部屋の中央へと近づく。

「こんにちは」

「こんにちは」

近づいてみて初めて見る光景に、パディは絶句した。

繭、と彷彿できたのなら、自分の脳内はまだ平和だったのかもしれない。あるいはそれは、蜘蛛の巣に絡まる獲物のようだと言えるかもしれないが、残念ながらそれは違和感がある。

あえて表現するのなら……人と人との繋がりというものを具現化

し、糸やコードという絆に絡まり、溺れている・・・そう言うのが一番適切だろう。

部屋の主であろうその人物は、なんと、全身を糸やコードに絡みつかれ、両手両足まで拘束された状態にあった。自由の動く範囲といえは顔だけのようだった。

スポットライトが照らされているように、その顔だけやけに神々しく映る。

しかし顔は至って平凡だった。

年はまだ少年と呼ばれる頃か、くりんと丸い目にガラスのように透明な瞳をはめ込み、純心無垢に見える頬とくちびるを持っていた。ひよこのような口を声なく開けるとにつこり微笑んで「こんにちは、パディ・デュランダ」ともう一度発音した。とても、拘束されている人間の表情とは思えない。

「探し物は何？パディ・デュランダ」

今度こそ、パディは卒倒しかけた。それでも踏ん張ったのは、それが何か受け入れられず、現実として見れなかったからだ。

無理もない。今まで少年だった顔が今度は少女へと変化した。

角度によって女顔にも見える少年、ではない。まるで別人だ。

切れ長の瞳に同じようにガラスのような瞳、薄いくちびるとちらりちらちと見える白い歯があどけない。輪郭も少し丸く、少年よりも少し年下のように感じられた。

パディは声がでなかった。一体何にどう、発していいかわからない。

混乱するパディを何度も見て、少女はゆとりをもってゆっくりと笑みを作って嬉しそうに声をあげた。

「パディ・デュランダ、久しぶり。そして初めまして。私はラス。レイストロの過去と未来を見つめるもの」

苦痛はないのか、普通の人が普段人に接するような気軽さで、少女・ラスはパディを見つめた。

そして眩暈のような感覚がパディの目の前に広がり、少女の顔は再び、少年の顔へと入れ替わった。

「パディ・デュランダ、久しぶり。そして初めまして。僕はセロ。レイストロの未来と過去を見つめるもの。君が来ることはわかっていたよ。そうさ、僕たちが君を鍵と伝えたんだ。だって、見えたんだ。未来が。だから僕はそれを伝えた」

少年・セロも同じように苦痛も何もなく、軽く微笑んでパディを見据えた。

パディは混乱する頭を人差し指で突付き、目を瞑って眉間のしわをより深くした。怒りや苛立ちはいい。何に怒っているというわけではなく、わかりやすい感情だ。

「……………」

十秒ほどして目が開き、目の前を確認するように眼球を震わせ、
瞼を開ける。

「……………・夢じゃないんだな……………？……………って、なんだよこれ！新
手のプレイかよ！俺は縄で遊ぶ趣味は」

「落ち着いて、パディ。君は質問しに来たはずだ。どうして俺なん
だ、と。僕たちは答えるために今ここに存在している」

「そしてその先に起こりうることを受け継いでもらうため、私たち
はここにいます」

また眩暈が起こり、少年と少女の顔が入れ替わる。見ているとだ
んだん酔いそうな感覚にパディの脳内がちりちりと少しずつ痺れて
いく。

「パディ。あなたは混乱している。でも私たちの言うことをしっか
り聞いて。あなたは鍵。私は未来で見てきたわ」

「女王は眠っている。でも君は起こされた。君は未来の可能性を広
げた。僕たちは未来で見てきた」

「あーあーあー！」

ついにパディは叫んだ。現実と幻がわからず、耳を塞いで叫ぶこ
とが精一杯だった。

セロとラスは入れ替わり顔を出し、きょとんとしてパディの名を
呼んだ。しかしパディは吼える一方で答えようとしなかった。

「どいつもこいつもうつせーうつせー！！一体俺がなんだってんだ
！！あの筋肉女から始まりプリンにわけわからねーくそ犬女王！！
さらには縄プレイが好きな巫女ときたもんだ！！」

巫女の二人は黙った。悪態に嫌悪を示しているわけではなく、ただ悲しんでいる様子だった。

「預言？見てきた？妄想は便所でしな！！俺は知らねえ、俺は関係ねえ！！」

一際大きな悲鳴が耳を破る。パディはその場で頭を抱え込み、縮まるようにしゃがんだ。ストレスの衝動で頭をかきむしる。

巫女は再びラスに変わると、彼女は悲しそうに瞼を伏せ、パディに向けて小さく口を開いた。

「耳を塞がないで、パディ。目を瞑らないで。これから起こることは目を瞑ってはもらえない。目を瞑る隙すら与えてくれない」

「そうさ、パディ」

糸とコードで雁字搦めにされた手が、ゆっくりと天に昇る。

「君は知るだろう、レイストロを。君は知るだろう、女王の死を。君は見るだろう、女王の誕生を、世界が再び生まれる姿を。そして見るだろう、世界が死滅していく様を。変わらない宿命を。歪んでいた事實は消えない、ほころびは直すことはできず、赤い涙が細く一滴だけ流れるだろう。それら全てを見るだろう。何も力を持たない非力な色彩の子供よ、泣かないで」

朗々と紡がれる言葉は、歌うようだった。

なだらかに紡がれる言葉一つ一つ、クリームのように甘く、口に溶けていく。続く言葉は夢を誘い、体の力を奪い取る。

気がつくともパディは恍惚と歌うセロに見入っていた。

——色彩の子供よ、泣かないで。

言い終えると同時に、なんとも表現しにくい虚脱感と、母に抱かれていたような、全てを預けたくなる暖かさが背中に広がっていた。まるで花が優しく開花するように、パディの全身を包み込む。

放心状態のパディをセロはにっこり笑い、覗き込んだ。

「さあお行き、パディ。君はこれから起こり得るものを見なくてはいけない。大丈夫、世界の全てを知っても君は君。これは僕たちが決めたことじゃない。世界が決めたことじゃない。君の意志はやがて女王へ繋がる」

「そうよ、パディ。私たちは全てを知り、理解したうえであなたと会話している。さあ、早くしないと赤き衝動があなたに噛み付くよ」

ラスはさあ、とパディを促す。するとパディの体は、操られるように自然と彼らに背を向け、ふらふらと扉へ向かった。パディ自身も気づかぬ間に、体は部屋から遠ざかる。

その姿を愛しく見つめながら、巫女たちは笑みを消した。これから暴かれる秘密と、人間でありたいと望んだ女王を想って。時代の流れと共に消えゆく己を想って。

「女王が泣いてるわ」

「女王が泣いてるね」

「泣かないで、って」

「泣いているのは自分なのに」

「世界が泣くわ」

「もう、すべ」

世界は何度でも生まれ変わる。

世界は何度も死滅し、女王は嘆く。己の終わりと無力さに。そしてただ、人間でありたいと願う、あまりにも儚い呪いに。

語り継がれる涙は、世界と共に続いている。

レイスト口歴1148年。世界の終わりまで残り二年と迫っていた。

ゆるぎない事実、隠されたもの。有限のループ。

このことを知る者は、ただ一人。そしてもう一人、これから知る者がいる。

その日その時まで、女王はただひたすら夢を見続けるだろう。人間として死ねた喜びを味わいながら。

レッドゾーン 8

呆然と扉を潜り、パディは扉を閉めた。思ってたよりも小さな音を立てて閉じた。あっけないと言わんばかりだった。

パディは扉に寄りかかったまま無言で床を見つめた。

瞼から抜けきらない光のように、先程見た巫女・セロとラスの姿が離れない。糸やコードに拘束され、自由という言葉をそのままそっくり抜いてしまった姿。誰もが哀れみ、嘆くだろうその姿。だが二人は何事もなかったようににこにこと笑い、会話をする。

巫女という存在だからだろうか？

ここに来てから——黒き腫瘍と化した町にいた時からかもしれない——何をどう見ていいのかまるでわからない。ここは本当に自分が今まで立っていた世界か危うくなる。

改めて、自分の場所に不安を覚える。ここがなんなのか、問いただしたくなる。

パディは扉から離れ、ブラックアウトと共に記憶から消していた自分の町のことを、思いかえしてみた。小さな町だったと思う。ラストイカの郊外に位置し、明るく賑わうことも誰かが訪れることもなく、静かだった田舎町。気がつけば、静寂は黒に落ち、穏やかだった表情は消えた。代わりに腐った連中ばかり集まるたまり場と化していた。

それでもパディは心地よく暮らしていたはずだ。数年間、浸っていたにも関わらず、その姿を感じる事ができない。最早、どちらが夢で現実か区別がつかなくなっている。

それは自分でも不思議な感覚だった。ここに来て、何かが変わりとつあるのだろうか。それこそ、鍵としての。

「……パディ・デュランダ？何をしている」

低く深い低音の声で現実へ引き戻され、パディは思わず顔を引きつらせて無意識のうちにつぶやいた。

そこにいるのは、エリエステスだった。ぴつたりと体の線にそった青いスーツは、いやらしさよりも猛々しい獣を思わせる。引き締まった筋肉が美しく曲線を描き、まるでしなやかな豹のよう。

パディは全身の神経を逆立て、来るかもしれない攻撃に構えるが、エリエステスは呆れながら小さな姿を見下した。

「部屋にいるよう、カルア少尉に伝えたはずだが……全く、お前とカルア少尉は相性がよくないようだな」

「そりゃ結構」

「まあ、仕方がないか。おおその想像はできる。……ところで、どうしてここにいる？ここに誰がいるかわかっているのか？この部屋のことは教えてなかったはずだが……」

「メイドに聞いたんだよ。俺のことを無理矢理連れてきた元凶を見るに、な。でも……あれはなんだよ。巫女ってやつはああじゃなきゃいけないのか？」

エリエステスはちらりと扉を横目にいれ、納得したように軽く頷き、顔をパディにしっかり向けた。そこに嘲りはない。

「そう、この中にいる巫女様……セロ様とラス様の預言によりお前はここに来た」

「んな預言なんててきとーなもんに頼っていいのかよ」

「あの姿を見たのだろう？あれが適当にものを言う姿に見えるか？」

見えない、とパデイの瞼がひくりと動いた。瞬きをする度に糸やコードが、薄暗い中で艶やかに光る。鮮烈だった印象は時間が経つにつれ、抽象的な言葉や曖昧な恐怖へと形を変え、より強いものへと変貌していく。

パデイが黙ると、エリエステスは片方の眉毛だけあげて「そうだろう？」と鼻で笑った。

「色彩の鍵。これから知る者。……お前はウナ様の心を開くと同時に、世界のことを知らなくてはならない。セロ様たちのこともそうだ。私たちの世界が、実は「預言」によってできていることも」

「はあ……？ 預言でできてる……？」

「そうだ。さあ、その前にウナ様の部屋に戻ろう。お前はまだ混乱の最中だ。世界を知るには、もう少し落ち付いてからがいいだろう。OK？」

「お……おい……」

「残念ながら、私も忙しい。話をする時間はない。さっさと行くぞ」

エリエステスの瞳が冷たい槍となり、パデイを突き刺す。パデイは一瞬身を震わせ、その瞳から目を離せなくなった。だが次の瞬間エリエステスの大きな平手にあい、パデイの体はたよりなく前へ押しやられた。

戻ると同時に、女のように黄色い悲鳴が廊下中に響き渡った。パデイとエリエステスは同時に耳を塞ぎ、同時に眉間にしわを寄せた。凶悪な顔が二つ並ぶ。

「……カルア少尉。人の顔を見るなり悲鳴とは……亡霊にでも取り憑かれたか？」

「うっせーな。男の悲鳴なんて気色悪いもん聞かすなよ」

「う……うるさいぞ、パディ・デュランダ！……エ……エリエステス大佐……。その……これは……パディが勝手に出て行きまして……」

「

慌てふためくカルア少尉を見るのも嫌になったのか、エリエステスは目を伏せ、片手を上げて軽くため息をついた。

「おおよその見当はついている。今後気をつけるように」
「はー！」

糸で引つ張られたように、一瞬にしてカルアの体は強張り、敬礼をする。

「まあどちらにしても、今から会議だ。カルア少尉」

「しかし自分は少尉。大佐クラスの会議には」

「いや、今回は少尉クラスも呼ばれている。隣国マルファとの緊急会議だ。女王候補と鍵の件についての話し合いになると思うが……」

エリエステスは歯切れ悪く言葉を飲みこみ、軽く頭を振った。

「会議に出ればわかるだろう。では、行こう。かわいいベリーちゃんも睨んでいることだ、退散しなくてはな」
「ちよつと待てよ」

二人の間を割るようにパディの小さな体が滑り込む。華奢で厚みのない体は二人の間に挟まると余計、小ささが強調されたが、顔つきはエリエステスと劣らぬ気迫のオーラを放っていた。

「変なあいつら……巫女たちが言ってたぞ。俺は全てを知る、と。そっぴゃあ、まだこの国のお偉いさんとやらに会ってないような気がするんだが？」

「……そうか」

エリエステスは気落ちしたように、目だけを下に向けると、腕を組んだ。

「確かに、お前は全てを知ることになるだろう……が、今は時ではない。その前に、一刻も早く女王を目覚めさせなければならぬ。お前はなんとも思っていないようだが、実は深刻な事態なのだぞ？ 何せ、女王が紡ぐ色彩がどんどん消えて行くのだからな」

パディの故郷のように、世界が蝕まれる。影が生まれるように、世界が黒く落ちて行く。

「それに、お前はまだ歓迎されていない。お前は女王を目覚めさせないかぎり、この城に……いや、世界に目障りなロットシャドウなんだ。それを忘れるな。全ては女王の目覚めからだ……OK？」

エリエステスの声は深い。進めば進むほど奥へ落ちて沈むようだ。抑揚があまり感じられない淡々とした声は、頭の奥底を痺れさせる。鈍い痛みと共に従わなくてはいけないように、錯覚させる。

長い台詞の後、パディは言いたい事を飲みこみながら、しゅしゅながら頷いた。

あつけない返事にカルアは目をきょとんと何度か瞬きし、ふらふらと二人の間から抜けるパディを目で追った。エリエステスは軽く

笑い、腕を解いた。

「わかってもらえればいいのさ、かわいいベリーちゃん。ウナ様の相手、くれぐれも失礼ないように。さあ、行こうか。カルア少尉」
「は！」

二人は訓練された動作で踵を返し、90度方向を寸分の狂いなく向いて大またで突き進んだ。

パディはただ黙って二人の背中を見つめ、やがて見えなくなると、次期女王候補がいる部屋に入った。今のところ、そこしか行くところがない。

部屋には案の定、ぼんやりとしやがんだまま、どこを見るわけもなく、虚ろな目で周りの景色を見つめているウナが一人座っていた。パディが入ってきても見ると、何か興味を示すこともなかった。

パディはどうしていいかわからず、とりあえず扉を閉めて壁にもたれかかるようにしやがんだ。

すると途端に体が重くなった。体中の疲れという疲れを凝縮し、がちがちに固めて下半身に埋めたような苦しさ、パディの体を拘束する。

全ては突然の出来事なのだ。口は反抗的に叫ぶものの、体や頭がついてこれないのは、パディ自身もわかっていて。わかっていても、どうにかしなくてはと気持ちばかりが先走っている。

実は相当弱まっていることに気づき、顔をしかめた。しかめっ面

がくしゃくしゃに縮んで、顔中に眉間にしわが寄る。どうすることもできない自分自身への苛立ちが、しわとなって押し寄せる。

「くそ……ふざけるなよ」

言い聞かせるように毒づいたが、抗いがたい眠気がパディの全身を飲み込み始めた。抵抗する必要性もなく、パディはそのまま全身を深い暗闇へと預けた。

黒い闇の中に点々と散らばる光の渦。先ほどまで見ていた光景が光りの斑点となり、弾ける。どろどろと溶けていきそうな眠気を心地よく向かえ、意識を落とした。

夢の入口のすぐ側で誰かがつぶやく。

「パディ・デュランダ。馬鹿な鍵。私を目覚めさせる？勘違いしないで。私は目覚めない。目覚める必要はない。なぜなら、ここは私の司る年ではない。女王は他にいる。私ではない、誰かが。それを巡り、醜い戦いが始まるわ。私はそれを傍観しながら、笑ってやる。だって、世界は変わらない。世界の呪いは、変わらない」

誰の声かは聞き覚えがなかった。冷淡な女の声だという以外、わからない。

だが、吐き捨てる強きな口調とは裏腹に、この声の主は怯えているな、とパディは思ったところで、完全に夢の向こう側へと渡った。

第一章 完

第二章に続く

張り詰めた空気が体を拘束する。身動き一つできない空間は慣れない者には息苦しく、慣れた者は失笑じみたものを口の端に浮かべていた。慣れた者の一人であるう、ラスティカの軍服を纏った男が一人、立ち上がった。身分は大佐、名はライスと言う。彼は個性を伏せ、一軍人として口を開く。

「では、会議を始める。始めに、ブラックアウトについてだ。ラスティカ第一軍大佐、エリエステス」

エリエステスは短く返事をし、毅然と立ち上がる。獣じみた圧倒的なオーラに誰もが一瞬怯む。だが、それに合わぬ冷静な声でエリエステスは淡々と言葉を連ねた。紫紺の瞳もまた冷たく一同を見つめている。

「女王の死と共に世界の秩序が崩れ、無気力な人間となり世界を荒廃へと導く——そうして始めたブラックアウトも数年経過しました。しかし「黒き腫瘍」は少なくなるところか増大の一方。女王の力はやはりここ数ヶ月でかなり弱まってるようです」
「ブラックアウトを手抜きしているのでは？」

この場にいるのはラスティカの軍人だけではなかった。深紅の軍服と対をなすように、冷たいライラックの軍服が揺れる。

対話相手は隣国であり、唯一国交と条約を結んだマルファだ。その軍人の一人である男は顔を上げると、嘲るように湾曲した目をエリエステスに向けた。中年らしい、油の含んだ目つきにエリエステスは何の反応もせず、報告を続ける。

「手を抜いたつもりはありません。今までにないほど武器を使用している。それを使う軍人たちも。――何もかも不足状態です。どこぞの国でも参戦していただければありがたいのですが、如何せん、戦う術を知らずぬくぬくと育ってるが故、どうにも手を挙げれない状態なのでしょう」

「何だと!」

「これは出すぎた発言を。お許しください、マルファ軍アレイ大佐殿。そういえば、私たちの国と同じ。戦うことなど知らずに、女王の恩恵で生きてきましたから」

マルファの軍人、アレイから齒軋りが虚しく響く。エリエステスは心の内でそつと鼻で笑った。

「どいつもこいつも何も知らない。戦う術など知らない。まるで赤子のような存在ばかりだ。」

マルファと言わず、ラスティカも同じだ。言った通り、女王のゆりかごで育った色彩の子供たちは争いを教わらずに生きてきた。こうしていがみ合う必要はなかったからだ。きれいな顔をして毎日を過ごしていた。

今もそうだ。どこか他人事のように汚れない顔をしている。血など見たことないと言わんばかりに、透明な光を持っている。こうして皮肉に顔を歪めているのは恐らく自分だけだろう、と思うと、エリエステスの顔はますます歪んでいくのだった。

「ブラックアウトは後ほど聞く」

耳はまだ赤いが、アレイは続けて言葉を続けた。冷静さはなくと

も激昂して我を失うということはないらしい。エリエステスは少しだけ顔を和らげた。

「パディ・デランダなる、時期女王を覚醒させる鍵が見つかったと聞いたのだが。一体それはなんなのだね？」

「言葉通りです。時期女王はまだ眠っている状態。それを起こすのが鍵となる人物だと、先代女王から伺っております」

「覚醒は？」

「まだその兆しは見られません。ですが、預言と女王が申しているのです、大丈夫でしょう」

「はっ、どうだろうな。女王の死という大きなものはずしたものだからな。信用できん」

大きな鼻息は静けさを一掃し、集中をとぎらせていく。エリエステスは再び皮肉で顔を歪め、アレイに手をかけようとしたときだった。

「そこまでにするように、アレイ大佐。私たちはお互いの荒を見つけるために来たわけではない。隣国で仲のよいラステイカと和平の話をしに来たのでしょうか？今からその調子では困ります……ねえ、エリエステス大佐」

「……ああ、そうだな。……マルシャル＝レイシー殿」

冷たい顔が笑う。それは男というより、娼婦のようなきれいな微笑み。

氷の女王のようだ、それがエリエステスから見たレイシーの印象だった。

「エリエステス大佐！」

荒い息遣いと共にやや甲高い声が廊下にこだまする。大理石は彼の声をより黄色く、エリエステスの耳に届くころにはこれが男の声かと疑いたくなるほど高音になっていた。

うんざりするほど何度も聞いている男の声に、エリエステスは半ばやる気ない気だるい様子で振り返った。

「……カルア少尉」

「……は……すみません……」

よほど走ってきたのか、カルアはエリエステスに近寄った途端膝に手をつき、全身で呼吸を数回繰り返した。ポケットからきつちりたたまれたハンカチを取り出し拭うと、全身を緊張させて敬礼のポーズをとった。そういうところは非常に律義だった。

「あの……」

「どうした。会議は終わった。話ことはもうないはずだが」

「いえ、違います。大丈夫ですか？」

「は？何がだ」

「その、会議の件です。あのよう挑発されて……」

「ああ、構わん構わん」

緊張して青ざめるカルアとは対照的に、エリエステスは軽く手で

あしらうそぶりを見せた。

「あの頑固親父のことを言っているのだろう？……そうか。お前は今日、代理だったな。知らないのも無理はない。あれはな、マルファの螺子のようなものさ」

「螺子……ですか」

「そうだ。きちきちに詰まっっていて動こうともしない、頑丈な螺子さ。マルファはどこか浮遊した感じがする。それを止めているのがアレイだと言われている。ただ、固すぎて抜くのに一苦労。……そうだろう？マルシャル」レイシー殿」

エリエステスは髪を揺らし、紫紺の目で真正面を射抜く。カルアを通り越し、その先にいるのは冷たい顔。

マルシャル——上級大将「レイシー・コースウェル。隣国マルファの要でありトップだ。しかしエリエステスにはそれ以上の繋がりがあつた。

レイシーはうすら寒く輝く目を細めると、真っ直ぐ、エリエステスに向かった。顔には微笑が浮かんでいたが、ぬくもりはまるでない。

「ああ、本当そうだよエリエステス大佐。アレイ大佐には困ったものさ」

冷気が舞い降りたのは気のせいだろうか。カルアは立ちまわるこゝとができず、全身を強張らせた。肌は痛みを感じるほど泡立っている。しかしエリエステスは幾分か陽気な調子で「やあ」と軽く返答を返していた。

だがエリエステスの内心は複雑なものが吹き荒れていた。冷たく、冷たく、拭きつける風雨のように。

近くで見ると、レイシーは非常に端麗な顔をしていた。ほっそりとした針金のような足、服の上からでもわかる引き締まった体。一見すると線は細いが、肩や肉の付き方は優男といより戦士のものに近い。それもそのはず、彼は剣に長けている。そのことをエリエステスはよく知っていた。

レイシーは切れ長の目をさらに細め、薄く微笑を浮かべた。

「頭をつぶしても抜くしか……と考えることもあるよ」

「おお怖いな、マルファの。……カルア少尉、先に行つてくれ」

「しかし……」

「こちらの上級大將様は旧友でな、久々に会つたのだからゆっくり話がしたい」

「旧友……ですか……？」

「ああそうだ。だからカルア少尉はパディたちの世話を頼む」

「……は」

カルアは一呼吸置くと、ようやく返事を返した。そして未練がましい目でレイシーをちらりとだけ見ると、足早に奥へと進んでいた。

「かわいい部下を持つているね」

「かわいすぎるのが難点、だがな」

「その点、君はかわいくなさすぎる」

「それは非常によいことだな。かわいい軍人などといわれるほど私は弱くはないよ」

そう取るか、とレイシーは続け、二人は合図したように同時に廊下の隅へと進んだ。そうするうちに二人の顔から大佐とマルシャルという仮面がはがれる。エリエステスから鋭さが、レイシーから冷たさがはく落する。それでもまだ声は張り詰めていた。

「まさかそんなことを言いに来たわけではないだろう？ マルシャル
「レイシー殿」

「まさか。もつと真面目な話をしに来たんだよ。……折角久しぶりに会ったんだ、いつも通り呼んでくれればいいのに。エース」

「まあそれもそうだな、レイシー。……では真面目な話とやらを聞こう。まあ大体想像はついてるがな。どうせ今回の和平についてだろう？」

その通り、とレイシーは嬉しそうに顔をほころばせた。赤みが少しかかった頬を見てもレイシーの印象は冷たい。だが友人と言う視線を取り戻したエリエステスの目には、ほんの少しだが幼さが見えていた。

「女王亡き今だからこそ、お互いの絆は強めるべきだ、という方向でまとまったのはいいことだよ」

「だが、女王が亡くなって時間が立ち過ぎている。なぜ今更？……例えば、シャワル国あたりが何かをやりそうだ、とか」

「さすがだね、エース。……女王の死はこの世界の色彩だけでじゃなく、ラスティカの地位も不安定にさせた。女王あってこそそのラスティカだからね。だからそこを突こうと、他国……とりわけ、シャワルは鼻息荒く狙っているだろう。争いが始まるかもしれない」

「国を狙い、さらには女王と世界をものにしようとしているのか。強欲を通り過ぎて呆れる」

レイシーは齒の隙間から笑い声を洩らし、エリエステスは軽く頭

を抱えた。

「昔からラスティカが中心であり、今も変わらない。それを不服と
思ってる連中はそれこそ昔から今までいるだろうさ。ただ、時代が
時代だ。女王がいらない。しかも預言ははずれた。国の中心が違う国
に渡るのも不思議じゃない」

「……そうだな」

エリエステスは苦々しいと口の端を歪めつつも、笑ったようなそ
ぶりを見せる。だが紫紺の瞳は轟々と煮えていた。

「だがそれでも。世界の中心は、女王が君臨する場所はここ、ラス
ティカだ」

「大した自信だね。その自信、どこから来る？」

「私は女王に捧げた者。女王を揺るがす存在を許すことはできない」
「……変わらないね」

レイシーは揺らめくエリエステスの瞳をそつと覗きこむと、ふと
笑みをやめた。エリエステスもまた、表情を引き締めるとどこか遠
くを見つめた。

「……レイシー」

「何？」

「お前は私の友だ。だが、ラスティカとマルファ。絆が深くとも、
いつ断ち切れるかわからない系。……こうしてのんびり話をするよ
うな仲ではないはずだ」

「そうだね。そうかもしれない。だがこれは国同士の話じゃない。
かつての学友仲間と他愛もない話がしたかったただだよ。意図はな
い。……そろそろアレイ大佐が切れるころだろうから、これにて失
礼するよ」

一瞥すると灰色の髪が銀色に瞬く。絹のような輝きはレイシーの冷たい顔つきをますます凍らせる。エリエステスは横目で礼を返し、視線を落とした。そこには赤く伸びる影しかない。

「いつまでこの平和が続くかな」

「さあね。エースの活躍次第かもしれない。……じゃあ、また」

二人の視線は交わることなく、レイシーは颯爽と廊下を渡った。小さくなる影をエリエステスは遠く眺め、ようやく消えた頃に息をついた。久しぶりの呼吸だった。

「調子が狂う」

一人つぶやき、壁にもたれかかる。どっと疲れが溢れ、額には汗が浮かんだ。大理石は冷たく、エリエステスの体温を奪う。それが心地よく、このまま眠りたくなる衝動に駆られる。

「食えない男になったな、レイシー」

そんなつぶやきを笑うと、エリエステスは壁から離れた。心にスITCHを入れ、大佐の仮面を付ける。すり減っていた神経は回復し、猛々しいオーラが心を包む。ようやく元に戻れた気がした。

窓の外は何も知らず、風が静かに葉を揺らし、薄い葉の隙間から太陽の光がちらちらと顔を出す。

そこでようやく、エリエステスは今日がいい天気だということを知った。

「……探しました。レイシー様」

「ああ」

抑揚のない声に顔を上げると、そこには案の定、部下の姿があった。まだ自分を着飾っていた年頃だろうが、彼女は質素だった。ありとあらゆる無駄を排除したような姿は性格そのものを映しているようである。

レイシーはエリエステスと話していた自分を隠し、マルシャルとしての顔に戻す。

「悪かったよ、リーレン」

名を呼ぶとリーレンは壁から離れ、レイシーの斜め後ろに控えた。飾り気もなく驕りもないのだが、こうした配慮は長けていた。それもそのはず、リーレンはマルシャルの右腕。故に言葉も飾り気があまりにもなかった。

「いいですか。上級大将なる人が隣国の城でふらふらしているものではありません。部下や特にアレイ大佐がお待ちしております。早く行きましょう。一刻も無駄にできません」

有無を言わさない言葉にレイシーは思わず笑ったが、リーレンはぴくりとも笑わない。冗談すら無駄だと排除しているようだ。ストイックな様子は嫌いではない。

わかったと返すと、レイシーは鋭く前を見据えた。辺りに冷気が

立ちこめ、あれほどにまで鮮やかだった色彩が消えて行く。

「この世界を……女王を、終わりにしよう」

リーレンはつぶやきに返すことなく、またレイシーも続けることなく、二人は雪のように静かに城を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2791z/>

色彩の帝国

2011年12月10日14時52分発行